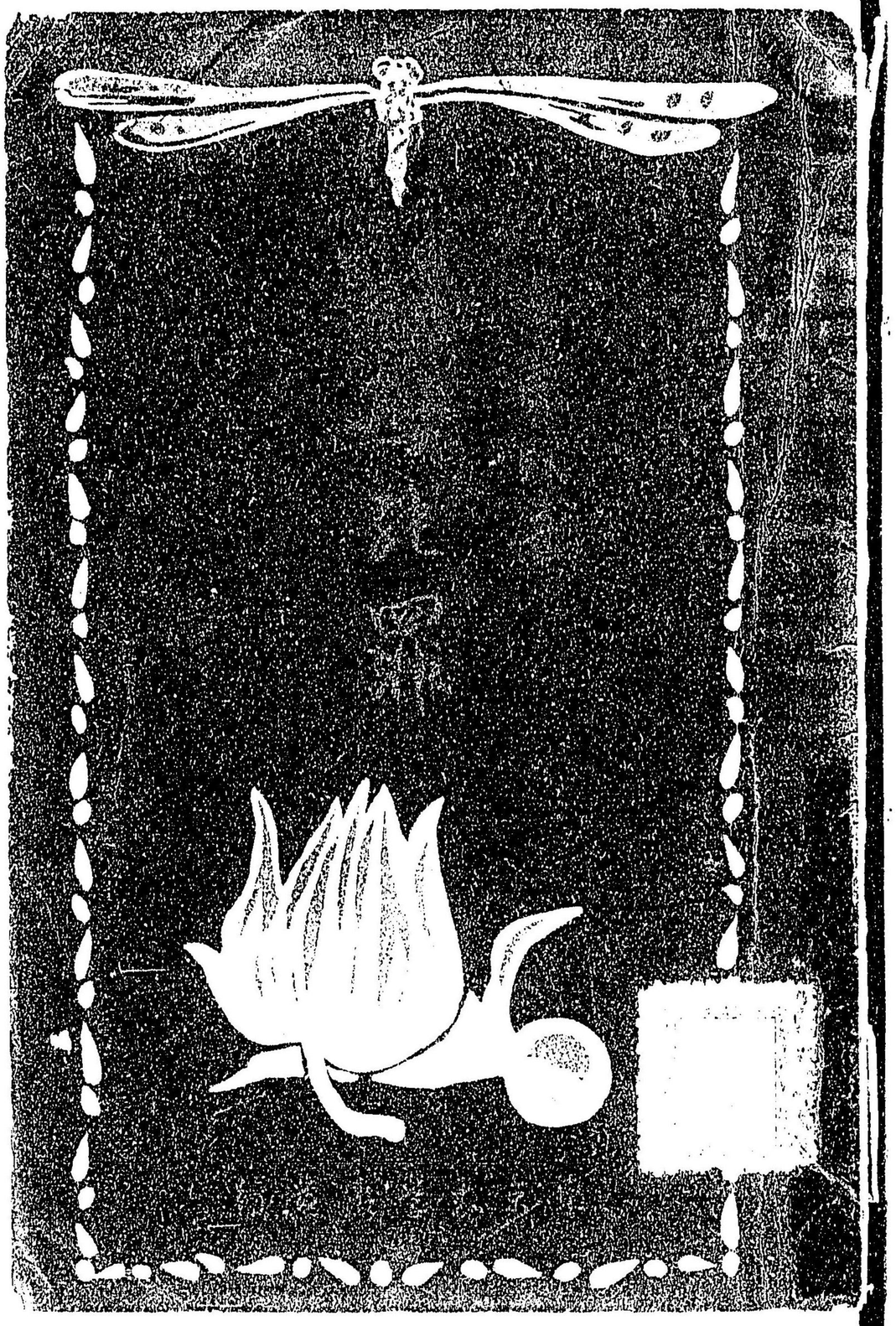
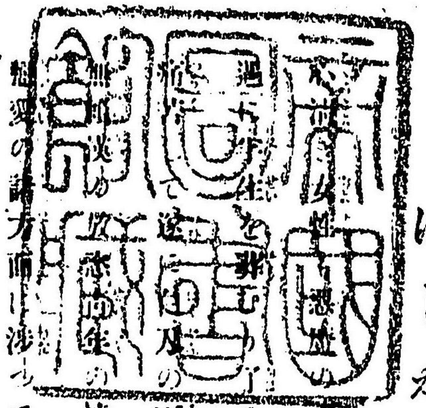


はしがき



女性悪魔の毒爪に身を過ち、子を捨て家を捨て、惨憺たる生を辿りつゝあるもの、しかも子を思ふ親の情に、眼昏み心惑ひ、遂に凶刃の下に命を終る。

世間の堕落生活、放恣淫蕩生の憤慨、處女の暗涙、親友の同情、すべて人生の罪悪、相愛の諸方面に渉りて深刻骨髄を刺す。

丁未十一月

雨聲山人識

池袋 25 図書

目次

一　餘計なお世話……一
二　意銷氣沈……五
三　屈原の口吻……一〇
四　特別のお情……一五
五　禮子が？……一九
六　恐れ入つた……二四
七　百人の梶原……二八
八　行年二十八歳……三三
九　兵六玉で澤山……三七
十　ヘッポコ畫師……四一

十一　無理無體に……四六
十二　濁酒の香……五〇
十三　屋根の有る家……五四
十四　暗から暗……五九
十五　書端書屋……六三
十六　四ッの袖……六七
十七　萱野の雨……七一
十八　阿鼻焦熱……七五
十九　其時は吃度……八〇
二十　浮世の義理……八四
二十一　美しき八字髯……八八
二十二　雲烟看過……九二

二十三　泣いじやくり……九六
二十四　流石は女……一〇八
二十五　檢視の役……一〇四
二十六　悲慘の境遇……一〇九
二十七　洋燈の光り……一一三
二十八　攻撃の鋒先……一一七
二十九　恥しいか……一二一
三十　追分ぶし……一二六
三十一　百鬼夜行……一三〇
三十二　馬鹿丁寧……一三五
三十三　今昔の感……一三九
三十四　お前百迄……一四三

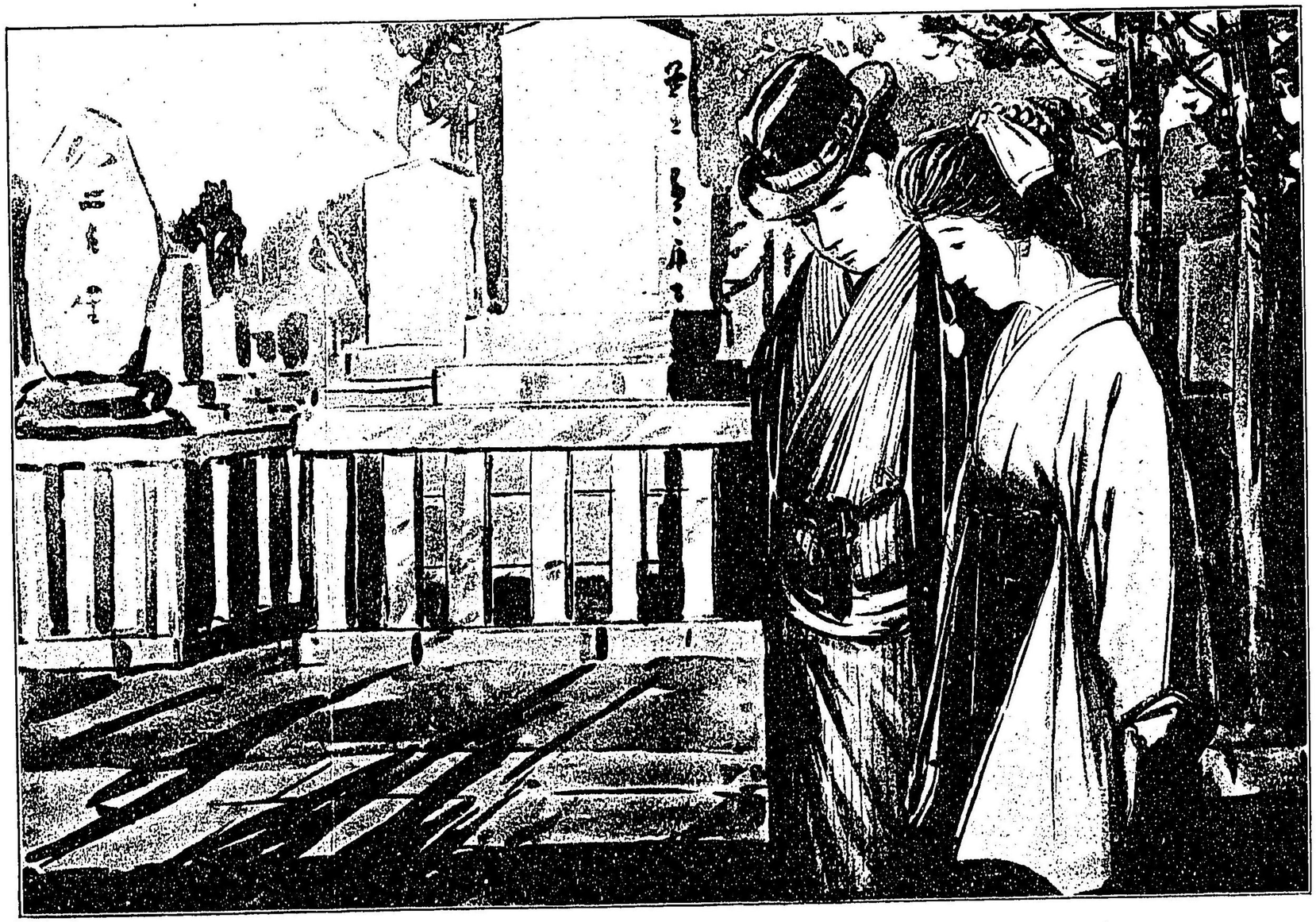
三十五 善は急げ……一四八
三十六 妾も人間ですよ……一五二
三十七 怒髪冠を衝く……一五六
三十八 巣鴨の御料理……一六一
三十九 可愛い夫……一六五
四十 赤の他人……一六九
四十一 過去の罪……一七四
四十二 罪悪の結晶……一七七
四十三 松枝の哀情……一八二
四十四 血涙を呑んで……一八六
四十五 二つの希望……一九〇
四十六 ユダの如き者……一九四

四十七 所謂大惡人……一九八
四十八 御同様日本人……二〇三
四十九 何故ですか……二〇八
五十 幸福なる哉……二一二
五十一 阿彌陀如來……二一六
五十二 大眞似目……二二〇
五十三 扶養の義務……二二四
五十四 古川の？……二二九
五十五 利益問題……二三三
五十六 兩親の信用……二三七
五十七 西洋の想夫戀……二四二
五十八 大切のお客様……二四六

五十九 一緒にお花見……二五一
六十 丁度宜い處へ……二五五
六十一 お前の勝手……二六〇
六十二 お嫁さん……二六五
六十三 ハイカラ……二六九
六十四 多恨の一滴……二七三
六十五 海老茶式部……二七八
六十六 十錢の甘藷……二八二
六十七 電氣鍍金……二八七
六十八 あらッ！……二九一
六十九 悶々しい女……二九六
七十 行衛不明……三〇一

七十一 海神の怒り……三〇八
七十二 をいてき堀……三〇九
七十三 眞平だよ……三一四
七十四 鋭と相談……三一九
七十五 一面の紅河……三二三

目次終



特13
58

家庭小説

母の罪

小原夢外著

一　餘計なお世話

かれこれ夜は既に十時過ぎで有らう、青々とした空には研ぎすましたやうな十三夜の月冴ゆ、此處彼所に枯骨の如くそゝり立つ、冬枯れの樹木は、霜柱あまねき地上に、疎影横斜を畫いて、時々枝を鳴らす木枯の風に、點頭いて居る。

今しも芝園橋教會から出た二人の青年は、靈廟前迄來たので、其處で別れやうとしたが、背の高い方の青年が頻りと同行をすゝむるに否みかねてか、その跡に付いて、靈廟に付いて左に曲り、山内に道入つた。

共に未だ徴兵猶豫中らしい青年、制服の上に羽織た外套の襟をたて、夜風を防ぎ乍ら歩をすゝめる。

帽子は房の下つた、賣藥行商人の冠るやうな菱形、ペン先を交へた徽章は慥かに慶應義塾と見うけられた。

夜目には確と解らないが、二人とも仲々何うして立派な顏容、背の低い方は丸顏の高い方は面長の、顏の恰好こそ違つて居れ、兄弟だと云つても、まさか嘘だと云ふ人はあるまいと思ふ程似て居る。

然し惜しい事には背の高い方の顏は、何處となく物凄い、云はゝ威有つて猛さ顏搏へ、背の低い方の人なつこき樣子と違つて何處となく、一種悲痛の色を浮べて、眉の間によせたる、太き皺は容易に解けない。

強度の近眼鏡をかけてる故でもあらうか、その眼も人を射るが如き態度、隆準の鼻と、臙脂をさしたかと疑はる計りのその半開の丹唇とがなかつたならば、慥かに

温和しく遊べる小兒をして泣き出さしむに足る顏容ちである。

角帽の前からはみ出した漆の如き髮は、左から右へ、グイと横に波打つて、白いと云ふよりは寧ろ青いと云ふ方に近い顏に對照して、いかにも凄い、一見して此青年は或一種の悲慘な運命に遭遇し、或は將來に於て遭遇せんとして居る事が解る。

背の低い方は絶えず快活な調子で云ひかけるが、高い方の青年は、何うやら氣乘りのせぬらしく、沈み切つた聲音で返辭をして居るのだ。

兎角して居る中に、二人は早くも月の光りのかすかに洩る、木立のしげき處に來た、左方に見ゆる赤き軒燈は交番の燈火で有らう、眠さうな眼つきをして、ポケットに手をつゝ込んだ儘、ぶら〳〵歩いては戻り、戻つては歩いて居つた巡査は、二人の靴の音にハッと氣がついて、姿勢を正してその方を屹度見た、二人の青年はそんな事には一向頓着なく、巡査の方には眼も呉れず、何か小聲で打ち談らひつゝ、通り行くのである。

『ちや何んだね、君は僕にいよ〳〵洗禮をうけろと斯う云うんだね。』

背の高い方の青年が云ふと、相手は點首て、

『先づさうだ、僕は何うも君の身の上が案じられてならんのだ、斯んな事を云ふと、餘計なお世話と君に云はれるかも知れんが……何と云はれても僕は君の身の上が心配でならんよ……君はいくら何と云つても、確かに素の千原芳樹君ではない、僕の知つて居る千原君は、そんな元氣の無い男ではなかつた。』

『いや有難う、僕は謝する、僕は君に感謝する……武下君、僕はそんなに元氣はなく見えるかね。』

『元氣か？、ハヽヽヽ、御自分にはお氣がつかれないかね、元氣どころの話しではない、丸で別人だ。』

『さうかね、さう見えるかね』と千原と呼ばれた青年は頭を垂れる。

『さうかねでは無い、全くさうだ、だからね、昨日も降校る時榴山と一緒だつたが

……榴山も大きに君が近來の容子を不思議がつてね、あれ程元氣の宜い、亂暴な千原が、何うも變だ、何か精神的の苦痛でもあるらしい、千原だつて二十二歳だ、女房が有つて宜い時分だからつて……。』

武下は千原を振返つた。

二　意氣銷沈

『馬鹿なッ、何を？、ハヽヽヽ。』

『ハヽヽヽ』と、同じく武下も笑つて、『だからさ、まあ終迄聞き給へ……そこで僕は大に君の爲めに榴山に辯護の勞を取つたよ、千原は近頃あんなに、にやけて來たけれども……。』

『何？、僕が近頃にやけて來た？。』

『ハヽヽヽさう怒るなよ、まあ早い話が、髮を分けたりなんかするから、さう云つ

たのさ。』

『だつてそれは……。』

『まあ〜、御話中だよ、默つて聞き玉へ……あんな風ににやけたけれ共、千原は決して星や蟇でめそ〜泣く弱い男でない、戀とか此とかいふもので、青い顏をするコスメチックの鍋頭とは、わけが違ふと斯う云つたよ。』

『ハヽヽヽ、賞めるのだか、けなすのだか……。』

『イヤ、賞めるのでも、けなすのでも決してない、事實僕が君を見て、感じた處を云つた迄さ、然し僕も檜山と同じく、君が此頃の變化を認めずには居られない、だから檜山の說も全然否認する事が出來なかつた。』

『すると何かね、君も僕を目して、戀に泣く星の子だと斯う云ふんだね。』

『いやそんな事は』と、武下は急に打ち消して、

『僕はそんな事を……、だから檜山の說にも反對したのだ。』

『だつて今、現に檜山の說も全然否認するわけにはいかないと云つたぢやないか。』

『いやそれは違ふ、それは君の誤聞だ、僕の否認する事が出來んと云ふのは、つまり君が此頃の意氣銷沈をだ。』

『さう、そんなら聞こえてるが……。』

『其處で僕は、大に檜山と說を戰はしたわけさ、檜山は飽く迄も戀愛說を把持する、僕は又僕で、その原因は戀愛如きものに有らずして他に有ると……、つまり論の勝敗はつかなかつたが、兎に角が此頃の意氣不揚は慥かに精神上の一大苦悶が有るに依つてだと云ふのは一致した、處でだね、僕等が協議したよ、現今のやうに、ふさいで居ると千原の身躰は何うなる事か心配でならない、まさか華厥の瀧の愚も學ぶまい、けれども明かにその健康を害するのは眼に見えてる、だから此際朋友の義務として、この救濟方法を採らなければならんと、斯う云つたやうなわけでね。』

『有難う、それで何もかも解つた……急に洗禮を受けうなんと云ひ出したのは、それに原由してるんだね。』

『さうだ、精神上の痛苦は信仰の力に依つて免かれるのは近道だ、何うだ、僕の勸告を君は容れて呉れるかね。』

『さよう―』と云つた儘、千原は考へ込む。

武下は尙語り次いで、

『僕は君が此頃憂鬱性になつた原因は問はない、だが、たとへ如何なる原因あるにせよ、獨りキリスト敎に限らず、宗敎の力なるものは總ての煩悶苦痛を芟除すると云ふ事は斷言して憚らない、何うだ君、一つキリスト敎に依つて安心の地に至る氣は無いか。』

『さあ、それは僕も考へて居らんではないがね、然し武下君、僕の煩悶は晋通の面白連の所謂煩悶とは違うんだぜ。』

『そりや認めて居るよ、だから僕は楢山にも……。』

『そりやさうだらうが……然し君はさう云つた處で、僕の煩悶の原因は知るまい、戀愛以外だと云ふのは知つてるだらうが……。』

『無論さ、何うゆり入り組んだ事條が有るよ僕には……僕も神でも佛でもない以上はね。』

『さうだらう』と點頭いて、『全く僕の煩悶の原因なるものは、殆ど世人が想像し得ざる或物に原由するんだ。』

『或物？』

『さう、つまり、或物を誅するか、乃至は助けるかに依つて、その問題は決するのだ。』

『え？、誅する？、何を……。』

『ハ、ハ、ハ、誅すると云つたて、まさか首を斬るわけではないよ、つまり敵の精神

上に、打擲を加へてやらうか、やるまいかと云ふ二點に止まるんだ、それで始終頭を惱まして居るもんだから遂ゐ……』と、手にして居たステッキで、行く手に枝を垂るゝ櫻の枝を發矢。

三　屈原の口吻

『それぢや君のその煩悶の原因と云ふ奴は、我々には到底想像し得ないんだね。』

解り切つた事を武下は尋ねる。

『さうだ』と千原は首肯して、『そこでだ、君等が僕の健康を案じて呉れるのは大に謝せざるを得ない、否大に感謝する、だが然し僕は折角のすゝめでは有けれ共、その洗禮をうける事だけは御免を被り度い。』

『何故？。』

『何故と云はれると返辭に窮するが、つまり此の問題と云ふのは、君等が見て呉れ

る如き重大なるもんではない、或事を決すと決せざるとによつて落着するのだから……何れにせよ一方に決定すれば、矢張素の千原芳樹に返るのだ……だからね、何も敢て洗禮をうけてキリスト教に歸依しなくとも……。』

『然し』と、武下は千原の言を遮つて、『ぢやが何でないか、そんなら……果して君の云ふ如くば結構さ……それにしても洗禮をうけて置いたつて萬更毒にもなるまいぢやないか。』

『さう、毒にもならぬ代り藥にもならんさ。』

『ぢや君は神の存在を認めんのだ。』

稍武下の聲は荒らくなつて來た。

『いや決してそんなわけではない、だからこそ毎日曜に斯うして教會に行つてるぢやないか。』

『そんなら……。』

『然し武下君、考へても見給へ、僕は教會に行くさ、キリスト教も信じてるさ、けれども汚れた教會の牧師の手に依つて、洗禮をうけたのを潔しとせんからね。』

『汚れた？』

『さうさ、獨り芝園橋教會のみにあらず、全國の……世界のあらゆるキリスト教會、否、キスト教計りでなく佛教でも、儒教でも皆汚れた人士の手によりて傳道されて有るのだ、だから僕は……僕は形式の虚禮を避けて、眞正のクリスチャンたらんとするのだ。』

『ハヽヽヽ、馬鹿にえらい事を云ひ出したね。』

『なあに……、ハヽ、さう云つた樣なもんだよ、敢て屈原の口吻を眞似るぢやないか、世の人皆醉ひぬ、我獨り覺めたりさ。ハヽヽヽ。』

『ぢや僕の如きもその醉ふた一人かね。』

『ハヽヽヽ、まあ御多分に洩れない方だらう、斯く云ふ僕なども既に醉ふて居るんだからね。』

『如何して？』

『如何してと云つて、味噌の味噌臭きは未だ眞の味噌にあらずで、世は醉ひたりとか、世は濁れりと云ふのは既に自分が醉ふて居る證據なんだ、我一人覺めたりならば……眞實に覺醒して居るなれば、そんな事は云はん。』

『大分六ケ敷なつて來たね。』

『ハヽヽヽ、これは失敬……と云つたやうなわけだから、僕がクリスチャンたらんとするも、僕自身自ら洗禮をする、醉漢が、醉漢に介抱されると云ふのは、今日の如き宗教界を指すんだと思ふよ。』

『恐ろしい〳〵、大氣燄〳〵。』

『いや全くだ、だから僕は……僕は君等の親切は謝する、さう云つて呉れる君等の厚意は、親も無く、兄弟も無い僕にとつては一層有難い、その親切なる君等の勸告

だから僕は義理にも洗禮をうけなければならん次第だが、今云つたやうなわけで、何うも、その僕の意に充たんから何分悪からず……僕をして教會に倚らずして自由に信仰さして呉れ玉へね。』

『いやそんな事は……僕等は何とも思やせんがね……、その何だ、つまり君の健康を案じられてね、それですゝめたのさ。』

『さうか、然し武下君、僕は近々の中に此の問題を解決して、再び昔の千原に返るよ、安心して呉れ玉へ、肉体の如きは精神の作用で如何ともなる、火を水と觀じて、火中を歩む禪僧もある世の中だ、心配しないで呉れ玉へ、此の千原芳樹の肉体は、そんな弱いもんぢやない、心配位ゐで健康を害するやうな事は萬々ないよ。』

月は何時しか、前を遮る黑雲のかくす所となつて、さなきだにうす暗き木下暗は益〻暗くなつて來た。

四　特別のお情

急に氣付いた樣に武下は、空を打ち仰いで。

『何だか月も曇つて來たし、夜も大分更けた樣だ、一体何時になる、今日は時計を持つて來んから、一寸見て呉れんか。』

『ハヽヽヽ、今日計りではあるまい、大方又飲代になつたんだらう。』

『何を……、馬鹿な、これでもクリスチャンだ。』

『ハヽヽヽ』と笑つて、千原は時計を上着のポケットから引つ張り出し、蓋をはねて、月の光りにすかして見乍ら『オヤ〳〵もう十一時になるぜ。』

『十一時？、多分そんなになる事だらうと思つた、ちやこれで僕は失敬しやうか。』

『なに、君は？、そんな約束ではながつたぢやないか。』

『でもなんだからね、家には默つて來たし、心配するだらうと思つてさ。』

『そんな事が有るもんか、夜泊り、日泊りは珍らしく無い君ぢやないか、大方君の阿父様でも、阿母さんでも、神明あたりの小意氣な家で、酔ふて管捲きや尚可愛いなんと云はれて、デレリとして、いちやついてる最中だと思つてるんだよ、まあ〳〵偶には僕の家にも一泊しても宜からうぢやないか。』

『こりや怪しからん、大層僕を侮辱するね、神明あたりの小意氣な家でとは怪しからん、品行方正なる僕をつかまえて……。』

『ハヽヽ、怒れ〳〵、先刻の返報だ、僕の事を先刻は散々にやけだとかなんとか云つた癖に、ハヽヽヽ。』

『こりやいよ〳〵出でヽ、いよ〳〵怪しからん、僕は君を侮辱した覺えはないぞ。』わざと武下は怒つた風をする。

『宜いよ、怒るなら、澤山怒れ、ハヽヽ、君が怒る位ゐは、屁の河童とも思ひやせん……時に僕の家に一泊しても差支はあるまい。』

『それは』と少し考へて、『ぢや何うしても僕を泊めにや拙かんといふんだね。』

『勿論！。』

『ホウ、こりやおそろしい權幕だ、宜しそんなら泊つてやらう、特別のお情を以て……然し明日僕の阿父にそのわけを證明して呉れるんだらうね。』

『ハヽヽヽ、馬鹿に恩に着せるね、宜し〳〵、承知した、證明してやるよ、『お家の資朗さんが昨夜神明のこれ〳〵斯っゆふ待合で、何と云ふ姐さんとお樂しみなさうでしたが、今朝の顏色を御覽遊ばしたか』なんて、ハヽヽヽ。』

『冗談云つちやいけない、……そんな事を云はれてたまるもんか、ぢや歸るよ。』

『嘘だ〳〵、芝公園〇號地、十三番地千原芳樹宅に宿泊せし事實正なり、但し利息の儀は……。』

『もう戯談も止せよ、ハヽヽヽ、然しそれ位ゐの……戯談を云ふ位なら大丈夫だ、そんなら心配するんではなかつたつけ。』

『何うして？。』

『何故って、さうさ、此頃は馬鹿に六ケ敷い顔をして居るから……僕等からウッカリ戯談云ひかけても怒る位ゐだつたからね……。』

『ハヽヽヽ、そんなだかね、然し六ケ敷い面は、僕の地顔だよ、ハヽヽヽ兎角女には縁の無い、心細い顔と來てるからね……御同様に。』

『御同様とは酷だね、これでも……。』

『お吉姐さんがつゐて居まさあね。』

『ハヽヽヽ。』

『ハヽヽヽ。』

多愛もない事を言ひ合つてる中に二人は、とぼ〳〵千原家の前迄來た。

西に紅葉館、東に二三軒の小さな平屋、前は街道、後は林、中にある黒塀を廻らしたゝ、株木門の二階屋がそれなのだ。

隣の紅葉館では、未だ燈火の光は、唄ひさゞめく、金切聲と共に扉を閉れる、入り様に門を閉めて、先づ千原は格子を開けた。

『入り玉へな。』

『先づ御主人から。』

聲は奥に聞えたと見えて、

『芳樹かへ。』と老婆の聲。

五　禮子が？

『はい只今戻りました』と芳樹は答へて、武下を促して登り込む。

勝手と女中部屋とを左右に見て、廊下をズーと行つた處の、奥の十畳は祖母の武子の室で、手前の八畳は應接室。

障子をあけると、六十――もう七十に近い切髪の老婆は、洋燈を手にして立つて居

たが、二人を見ると均しく、

『オヤ、資朗さんも……、暗らからうと思つて今燈火を見せてあげやうと思つて居た處だよ』と素の座になほる。

『いゝえもう馴れて居ますから。』と武下は頭を下げて、『叔母さん、今夜は又御厄介になりに參りましたよ。』と云ふ、芳樹も、

『徒然なもんですから、武下君を引つ張つて來たんです、君の家なんかに行くもんかつて、强情を張りましたけれどもね……。』

『こりや怪しからん。』と武下は芳樹を白眼む眞似して、『嘘ですよ、叔母さん、芳樹君の云ふ事なんか當になりませんね。』

『ホ、、、、何が何だか妾には一向……お湯も沸いてるからお茶でも入れましやう、時に資朗さんは暫く見えなかつたね。』と、急須を取る、

『いゝえ御辭ひなく』と武下は一應辭退して、『眞實に大變御無沙汰……然し叔母さん、この四五日前に來たぢやありませんか。』

『ホ、、、、さう〳〵、年を老るとこれで。』と、老婆はニコ〳〵して、『さあ二人とも火鉢の傍にお倚り、後を閉めて、馬鹿に今夜は寒いぢやないか。』

『さうですね。』

『何うも外は大變な霜柱ですよ。』

二人は桐胴の大きな丸火鉢の前に据つた、祖母の武子は、茶を汲んで、それにビスケットを箱の儘出してやる。

『到來物だよ、こんなものでも何も無いよりは宜いだらう。』と云つて、今度は芳樹に今夜は大層、例よりは晩かつたぢやないか。』と

『はい。』と、芳樹は頭を掻いて、『實はその牧師と、下らん話をしたり、又歸りには武下君と、話乍らゆつくりして來たもんですから。』

『さうかね、そんなら何だけれど、妾又何うしたのかと心配して居つたよ。』と、云

つて、ビスケットの箱に氣がつき、『オヤ〳〵、妾とした事が、封も切らないで……芳樹も芳樹だね、仲を開けて資朗さんと喰べたら宜いぢやないか。』

『私ですか、私なら……。』

『そんなに柄にもない遠慮するもんぢやないよ。』と芳樹は武下の方を向く。

『ハヽヽヽ』と武下は笑つて、『遠慮するのぢやない、その箱を開いて下さるには及ばない、僕が自ら開いて頂戴すると云うんだ。』

『ハヽヽヽ何の事だ、僕は又何時ものやうでもない馬鹿に遠慮してると思つたよ。』

『ハヽヽヽ。』

『ホヽヽヽ。』

二人が笑つて居る中に、芳樹は、包紙を裂き捨て、蓋を開け、二つ三つ抓んで武下にもすゝめ。

『祖母さんは？。』

『妾かへ？、ホヽヽヽ、そんな物が喰べられるやうだと宜いけれど……。』

『ホンにさうだつけ、ぢや武下君、二人で有る中、食らうぢやないか。』

『ハヽヽヽ、いくら腹が空いて居つたつて、このビスケットが二人で皆喰へるもんか。』

『喰へない事が有るもんか。』

互に、云ひ爭ふて、仲宜く、ビスケットを喰つてるのを、ニコ〳〵して見て居た祖母の武子は急に思ひついた樣に。

『時に芳樹や、今迄あの禮子が見えてのう。』と芳樹の顏を見る。

『えッ、禮子が？。』

喰ひかけたビスケットを手にして芳樹は眼を丸くすると、祖母は火鉢の灰をかき揃らし乍ら、

『今し方歸つた計りなんだよ。』

『ちやこのビスケットは……』と、云つたが、急に芳樹の顔色は變つた。

六　恐れ入つた

武下は、一寸芳樹の顔を見たが、やがて又ビスケットを口へさらへ込む。

『お前にも逢ひ度いつて、今迄待つて居つたけれども……何時もかけ違つてお前は逢はないから顔も知るまいが、仲々何うして十八歳とは見えない位、成長くなつたよ。』

武子は芳樹の容子には氣もつかずに謀り立てる。

『さうですか、ハ、――成程』と云つた切り芳樹は、苦虫を嚙み潰したやうな顔色。

武子は初めてその体に氣がついて。

『オヤ、お前は何うしたの、大變顔色が悪いぢやないか。』

『私ですか、いーえなあに、その少し風邪の氣味だと見えまして、頭痛がしますから……。』

『頭痛が？、そりやいけないよ、大事におし、今度の風邪は大變性悪だと云ふから。』

『はい、然し、その心配する位ゐでも有りませんよ。』

『けれどもね、なんだよ、大事にしないと……、何でも始めからさう大したもんでは無いんだから……お寢み、お竹を起して床を敢かせやうか。』

『いーえ、もう寢たら何んです、私共が敢きますから……祖母さんのこそ延べましやう。』

『妾の？、妾は宜いよ、それからね、あの二階の押入れので、夜具で足らなかつたら下から持つてお出で、資朗さんに風邪でも引かせるといけないから……。』

『ナアニ、澤山ですよ、三組計りありますから』と答へて、芳樹は武下を見返り、

『ちや武下君、寢るとしやうかね。』

『さう、寢てから話すとしやうや、飛んだ御迷惑をかけるね。』

『當り前だ。』

『こりや恐れ入つた、ハヽヽヽ仲々君の矢張にはツカリ立たれんよ、ハヽヽヽ。』

『餘計なお世辭なんか云ふからさ。』

『ハヽヽヽ。』

祖母の武子も立つて、夜具を取り出しにかゝる、武下と芳樹はそれが手傳ひをして床を延べてやるのである。

『芳樹、妾の方は煙草火丈あれば宜いから皆火を持つてお出で。』

『それではお祖母さんは？。』

『いゝよ、妾はすぐ寢るんだから。』

『さうですか』と云つて、芳樹は火量に火を取れば、武下はビスケットの箱と、二人の帽子とを持つて立つ。

『お寢みなさい。』

『叔母さんお寢みなさい。』

二人は共に、次の間に出でゝ、箱梯子を登つて、上り口の六疊の間を通りすぎ、奥の八疊に入つた。

こゝは芳樹が書齋、さして新らしい建物とは云はれないが仲々凝つた、洒い細工をして居る、南は障子を明くれば、林を見下す事が出來、北は一間半計りの窓が有つて、そこからは道行く人を見る事が出來る、光線の工合が非常に宜さゝうな室で、一間の床の間には墨蹟痕るが如き朱子鞠學の詩の一幅、落款は長三州として有る。その傍に二本立ての總桐の本箱が二つ、二尺に三尺五六寸の紫檀の唐机は、窓に倚つて並べられ、火鉢、座布團、墨汁壺、洋燈、皆それ〳〵行儀宜く並んで居る。

芳樹は手早く洋燈に火を點じ、火鉢に火をいける、次の間に行つた武下は押入れを開けて夜具を運ぶ。

やがて二人は仲宜く枕をならべて、一樣に洋服は明日の朝早く起きんとてか枕元に

置き、煙草を吸ふ。

『君の家は宜いね、僕は何時でもさう思うよ、君と一緒に此室に臥るのは、まるで仙境に遊ぶやうな氣がしてね。』

先づ武下は口を切つた。

『ハヽヽヽ、又お世辭か、今夜は大層お世辭を云ふぢやないか。』

芳樹は眼鏡を外し机の上に置いた。

七　百人の梶原

『いやお世辭でも何でもない、全くの話だ』と武下は夜具から乘り出して、眞實の話、僕の宅は前に電車が通りて、おまけに小兒澤山と來てるからね、たまつたもんぢやないよ、山水秀靈の地には英雄を生ずると云ふが、蓋し君の君たる所以又此處に有るかなだね。』

『ハヽヽヽ、又馬鹿な事を云ひ出したな、然し武下君、兄弟の澤山あるのは羨ましいよ、騷がしくて困るとか、何とか云ふのは贅の極だ、世に何が淑しいと云つて兄弟が無い程寂しく、又つまらんものは無いぞ。』

『それも一理有るがね、然し僕のやうにあまり有つても困るよ、姉が三人、妹が二人と云ふわけなんだからね、女の兄弟は實につまらんよ、何一つ相談相手になるでなし。』

『さうも一概には云はれまいさ、僕は女でも宜いから姉妹を欲しいよ。』

『ハヽヽヽ、無い者の目から見たらさうかも知れんが、君、女程度し難い者はないぜ、君なんか無くて幸だ。』

『不幸でも一人か二人有つた方は宜い。』

『强情な男だね、ハヽヽ解つた、そんな事を云ふのは、早く妻君を迎えてくれると僕に叔母さんへ云つて呉れろと云ふ謎だね。』

『何を……馬鹿な。』

『ハヽヽヽ、さうぢや無けりや、これ程僕が兄弟の利害を述ぶるのに、耳を貸さんちう法がないからね。』

『ハヽヽ、大きにさうかも知れん、然し武下君、僕が假りに妻を持たんとするも、決して君の如き社會から信用の無い男を以て祖母に談判は頼まん、又撰擇も頼まん、僕は僕自身でやるから心配するなよ。』

『ソン畜生、怪しからん事を云ふね、社會に信用がないのなんのとそりや少し酷と云ふもんだ。』

『酷と云ふか、何と云ふか知らんが、事實はこれを證明して餘り有るからね、ハヽヽ、怒つたか、色男……。』

『ホイ、今度は色男呼ばはりか、ハヽヽ、何者か讒者の有る有りて、大に我輩の事を君に惡し様に告げたと見えるね。』

『そんな事が有るもんか、百人の梶原が居ても當御本尊は頼朝ぢやないからね。』

『時政位ゐな處だらう。』

『ハヽヽヽ、眼光豆の如く、又英雄を見るの明なし、可憐一塊の臭皮袋か、ハヽヽヽ、乞ふ漂母の識りを招く勿れだ。』

『オヤ、又大變六ケ敷い事を云ひ出したね、陳粉漢が聞いて呆れらあ、ハヽヽヽ飛んだ淮南公だ、ハヽヽそれは一生人の股をくゝつて暮すと云ふ前ぶれかね、イヨウ、ハイカラ淮南子ッ！。』

『何とでも云へ、形を以て論ずる勿れだ、孔子もこれを子羽に失すさ、鼠輩何んぞ我方寸を知らんやだ。』

『えらいッ、次には肱を曲げて枕とすかねハヽヽヽ。』

『そんな事が有るもんか、あれは顔回のやうな負け惜みの強い奴の事だ、樹下石上の難行に、眞如の月を見るに至つた我輩、ハヽヽヽ御氣の毒ぢやが君等のやうな

……顔回のやうな、ふわ〳〵したひねくれた魂は持つて居らんよ。』

『大氣焔？、時に少々伺ひますがその樹下石上とは櫻の木の下の石に、犬か小便したのを見たと仰しやるので御座いますかね。』

『馬鹿な事を云へ、ハヽヽヽ、又凡夫凡夫丈けの事を云ふわ、故にキリスト生れ、釋迦降誕す、始めに有る者は矢張末にも有るな。』

『何の事だ、ハヽヽヽ南無アーメン陀佛か、ハヽヽヽ』と云つて少し氣を換へ、『時に千原君、僕計りでバクツイては、いくらなんでも、變だから、一ツ何うだね』

と、武下はビスケットの箱を突き出した。

『變な事が有るもんか』と芳樹はその方には見もやらず、僕は何うしてか今夜はビスケットは食ひ度う無い、皆喰うて呉れ王へ――殘つたら持つて歸つて呉れ』と新らしい紙卷を吸ひつけて、壁上の父六郎の油畫を見入つた。

八　行年二十八歳

さこそと云はぬ計りに武下は芳樹の顔を眺めて。

『何故だへ、あれ程好きだつたものを……何うした、そんな事は云はんで喰ふさ、僕一人でやるのもなんだから。』

『宜いよ、僕は食ひ度くは無いと云つたら……解らん男だね。』

『さうか、それ程お厭やなもんなら』と武下は長煙管の雁首でその箱を引きよせて、

『時に芳樹君、叔母さんが先刻云つた禮子と云ふのは一体あれや何だえ、君の煩悶の原因と云ふのはそれでないかね』と、二つ三つ一時に口に抓み入れ乍ら問を改めた。

『えッ』と、此時初めて芳樹は油畫に注いであつた目を、武下に移して、『君はそれを聞いて何うするの？。』

『何うするつて、さう云はれると困るけれ共、只僕にさう感じられたからさ。』

『何う感じられたと云ふんだ。』

『何うつて、只ね僕は……つまり斯うさ、先刻叔母さんが禮子とか云ふ婦人の名を云つたら、急に君の顏色が變じたから、それで……これは君の許婚か何かで、君が厭ひ扱いてる女かと思つたよ。』

『フム、すると矢張君も、僕の煩悶の原因を以て戀愛に有りとするんだね。』

『いゝや……然しそんなら一体禮子と云ふ女は何だね、君に何等の關係が有るね？。』

『そりや追々わかる……いかにも君の推測の如く、禮子もこの問題に關係して居るけれども主たるもんでない、云はゞ從物だ。』

『從物ー、ぢや何だね、今は此問題……君が煩悶の原因を僕には云はれないと云うんだね。』

『まあさうだ、そりや强いてと有れば、云はないわけでもあいが、然し問題を解決

する上に付いては、他人に容喙して貰はん方が早いからね。』

『さうか、そんなら聞くまい、君が云ふ迄待つて居やう、然し禮子その女が如何なる女だと云ふ位ゐは知らして呉れても宜からう。』

『それは搏はん、然し聞いて如何する？。』

『さう早速の追及は恐れ入るがね、只その僕の想像を延長させる迄さ。』

『ハヽヽヽ、又臆說を逞しうせんとするんだね、宜しそんなら云はう、然し他言は無用だよ。』

『萬事承知ー、一体何んな女だい。』

『どんな女と云はれても困るが……實は僕は一回も逢つた事は無いからね……、姓は駒澤名は禮子年は十八歳で、東京音樂學校の生徒だと云ふに止めておくさ。』

『ハテね……阿父さんは？。』

『いやそれは云はれん、それを云ふと何もかも解るからね、ハヽヽこれは當分云

よまい、後で云はうよ。』

武下は『ハテナ』を二三度くり返して、小首をひねつて居つたが、

『千原君、君の亡父さんは、洋畫家で有名な方だつたさうだね』と、突拍子もないことを問ひかけた。

『亡父？』と芳樹は吃驚した風で『ハ、、、有名と云ふ程でも無かつたらうが、何にせあの當時はね、佛國の水を四五年も呑んだ洋畫家は僕の父一人だつたさうだから……然し今から見れば笑止なもんさ。』

『いや仲々何うして、僕の父は云つて居つたよ、今迄生きて居たら大したものになつて居つたらうつて……一体君の幾歳の時死んだんだ。』

『生れた年さ、僕は二月生れて父は九月死ぬ、行年二十八歳さ。』

『二十八歳？、、、たつた？。』

『あ、、生きて居りや今年は丁度五十だ』と云つたが、急に『武下、寢やう、十二時になるぜ、明朝は八時からぢやないか』と夜具にもぐり込む。

『ウム、今寢るよ』と武下は、ビスケット抓む手を休めて、壁上の油畫を眺めて居たが、何か思ひ當る處が有るものゝ如く、點頭いた。

九　兵六玉で澤山

『コン畜生、よく吠えやあがる、シッ〜』と、かみつくやうに吠えかゝる犬を叱りつけ乍ら、羊羹色になつた眞岡の五つ紋に、襟垢のついた綿仙の袷　それに汚い小倉の袴といふ五十近くの酔漢は、よろつく足下危く溝板を渡る。

御徒士町と云へば、どうやらあまり汚い町のやうには聞えないが、それも處によりけりで、此處口丁目の如きは、萬年町につゞく、不潔な町、百軒長屋とは名計りの古い屋根瓦の、ところ〜はげかゝつた大抵二間間口の棟割長屋。

住民の大半は、造兵の職工と、貨車挽く車夫とで、電車の車掌と、巡査が此處の上

流といふ始末だから、盡は大抵留守で、夕方になると騷がしくなつて來る、盡の間はそれこそヒッソリ閑として至つて物靜かなもの。

各個に開け放した窓からは、今しも居殘る連中が盡飯の最中らしく、鰯やら、何やらを燒く音、ジュー〳〵一種異樣な臭はプンと鼻を刺戟する。

醉漢は長屋の横手の露地を拔けて、溝板を踏みならし乍ら、突き當りの、陶器の標札のかゝつた、小汚い平屋の前迄來た。

『オイ、今歸つたよ、御前樣のお歸りだ。』ろくに呂律も廻らない。

中にはチョッと、いま〳〵しさうに舌打する音がしたと思ふと、間もなく格子は開けられて、中から首を出したのは四十前後の大年增。

『何んだね、お前さんか、つまらない、御前樣も無いもんだ』と醉漢の吐く熟柿の匂ひに顏を背け乍ら、頬をふくらして頤を返す。

醉漢はそんな事には一向頓着なく、大層の御機嫌で、ニコ〳〵し乍ら、跡を閉めて

その尻について、上り口の三疊を通り、右手の六疊の間に入つた。

お粗末極まる長火鉢に、茶筅笥と、それから此屋には不似合の鏡臺……こゝは應接間も、化粧室も、時に依つては寢間にもなるといふ重寶な室、醉漢は長火鉢の前にグイと胡座をかいた。

『お前、盡飯は』と、惚れ〳〵と女の顏を今更のやうに眺める。

『飯なんか何うでも宜いよ』、女はけんどんな返辭。

『俺になら何も遠慮もいらないせ、俺ら此の通りの始末だから。』

『誰がお前さんになぞ遠慮してるもんかね』と女はヂロリと醉漢を白眼めて、『又醉拂つて來たんだよ。』

『ハヽヽさう云つて呉れるなよ、今日は目出度い事が有つたから、身祝ひをやつたわけさ、いよ〳〵運は向いて來さうだからね。』

『運？。』

『さうよ、へン、泥の中にあつても玉は玉だ、目の有る奴が見つけりや、拾ひ出さないでおかないからね。』

『フム、玉も無いもんだ、お前さんが玉なら、家根の上は、皆玉だよ、玉で御座いも凄いや、玉も玉、兵六玉だらう、あんまり大きな事を云ふと、ホラ、天井の鼠が笑つてらあね。』

『何ッー、へう、へう、兵六玉だ？。』

酔漢は、眼を光らす。

『フム』と、女は鼻の先きで笑つて、『お前さんなんか兵六玉で澤山だよ、一体何の能が有つてそんなに飲んだくれで歩行の、一文の働きも無い癖に……。』

『こゝこりや怪しからん、松枝、きゝ貴様は何を云ふ、そゝそれは夫に對していふ言葉なんか。』

酔にもつれて、呂律もまはらぬ舌で、尙何事か云はんとすると、松枝は屹度白眼つけて。

『へン、夫に對しても無いもんだ、笑はせるよ、亭主野郎で御座候つて威張りたけりやそれ丈のことをして威張るさ、何が夫なんだね、お前さんは妾の男妾ぢや無いかい。』

『男妾？。』

『さうさ、考へても御覽よ何處の國に妻が亭主を養つて行くものがあるのかね、それも一年や半年なら宜いさ、指でも折つて數へて見て御覽、何年になると思ふんだね、十八年間と云ふものは妾がお前さんを食はして置いたぢやないか……それで夫呼ばはりも凄じいや、男妾でなくて何で御座いッ。』

長煙管取り上げて松枝は莫を輪に吹いた。

十　ヘッポコ畫師

『何を云ふ、きゝ貴様は？。』

弱點を松枝につかまれて居る故か、古川と呼ばれた酔漢は、あまり強くも云ひ張れない。

『何をではないよ』と、松枝は、ポンと長火鉢の縁に煙管を叩いて、『へン、あんまり虫の宜い、御託は並べて貰うまいよ、お前見たやうな山落野郎と一緒になつて居ればこそ、長屋の鐵棒引きなどにも妻君さんとか何とか云はれてるけれども、これでも昔しはお前の恩人の千原曲水齋伯の奥様だよ、云はゝお前なんかは妾の家來筋ぢやないか。』

『お前さん』は何時しか『お前』と變つた。

『ぢや貴様は……貴様未だそゝそんな事を云つてるんだな。』

『勿論さ、何時迄も云つてるよ、死ぬ迄も云ふつもりさ、お前見たやうな兵六玉にかゞわかされないと、今は立派に千原家の奥様で威張つて居れるのに……こんな

目には一体誰が合はしたんだね。』

『そゝそれを、俺が知るもんか。』

『知らない』と、松枝は聲を鋭くして、『知らないも宜く出來た、知らなきや云つて聞かさうか、そこに据つて居る、犬にも劣つた古川辰二郎と云ふ野良犬さ。』

『野良犬だ!?。』

『さう、お前なんかは人と云ふ名のつく代物では無いんだよ、赤とか白とかいふ名が相當だよ、犬でも三日飼へば三年その恩を忘れないと云ふが、お前はなんだね、あれ程世話になつた千原家の恩を忘れたのかえ、それではあんまり虫が宜すぎるぢやないかね。』

『……』

此處に於てか古川はギックリ行きつまつた。

松枝はそれを横眼でヂロリ白眼つけ、

『え、一体妾を何と思ふの？、何と思つてそんな口幅の廣い事を云ふの？、千原家に居つた時の事は別としてさ、此の十八年間といふ長い歳月を誰が爲めに滿足に乞食にもならないで居たと思ふね。』

『そ、そりや、わ、、解つてる事ぢやないか、何も今更、あ、あらたまつて……。』

『い、や、改めて云ふよ、お前の様な野良犬には何度も〳〵云つて聞かせないと忘れるからね……お前なんぞは、妾が養つて行かなけりや今頃は何んな風になつて居たとお思ひなの、フム、畜師で御座いもないもんだ、お前見たやうなヘッポコ畜師は……宜くお聞き畜師で候と威張るには千原見たやうに、廣い日本に何人と指を折られるやうになつてこそ畜書きとも云へるぢやないか、何んだねお前は、臺處の澁團扇の畜にも劣つた畜を書いて……お前なんかい運が向くなら、泥鰌に羽根が生えてお月様にならあな。』

『い、よ、解つたよ、云つて呉れるな、耳に蛸だ。』

『い、え云ふよ』と松枝は何時結つたかわけの解らぬ丸髷のほつれ毛を齒でキリと嚙み切つて、お前なんぞは、いくら妾が云つたつて、聞き入れる野良犬ぢやないんだけれども……默つて有るのも業腹だから云はあね、眞人間の云ふ事は有難いと思つて、聞いて居あがれや宜いのに、何ぞと云へば解つてるの、耳に蛸だの……凡倉にも程が有らあね』と、プッと吐き出すと、折惡しくも顏を上げた、古川の鼻の邊へペタリ。

『コラッ、お前は何をする！。』

流石古川も怒らずには居られなかつた。

『ホ、、何もしないよ』と笑つて、『怒つたかえ、怒つたの？、澤山お怒り！、サア妾を打つなり蹴るなり何うともするが宜いよ、ホ、、お氣の毒様、まさか打つもせまい、明日からも鼻の下が干上るからね。』

飽迄松枝に毒つかれても、働のない……妻に養はれてる身の悲しさ、古川はさらば

とて打つ事も出來ない。

『汝ッ！』と、云つたが、握つた拳は振上げもせず、徒らに膝の上で慄はすのみだ。

十一　無理無體に

『ホ、、、、怖いのね、拳なんか握つてサ、オヤ〳〵眼も光るよ、丸で兎のやうだ、ホ、、、立派な男だね、道理で妾が迷はされたよ、ホ、、、お前の面は眞實に千人に一人と云ふ面だよ、美男子だよ、眼は猿眼で、面が赤くつて、、、おまけに反齒で、ホ、、、珍世界……花屋敷に居るのはありやお前の兄弟かね。』

『何ッ！、貴樣は……まだそんな事を云ふか、許さんぞ。』

『誰が許して呉れと云つたえ、ホ、、、憚り乍らこれでも千原芳樹の母だよ、お前ら見たやうな、素寒貧の野良犬に、頭を下げるやうな馬鹿ではないのだよ。』

『宜しッ、その言葉を忘れるなッ！』と、吉川は唇をぶる〳〵と慄はして『ウム、宜

しッ！、ぢや、き、貴樣は他に愛憎が盡きてそんな事を云ふうんだよ。』

『さうさ』と松枝は、グイと襟をくつろげて、『そりや當前だあね、ホ、、、ぢやお前は初手から妾がお前見たやうな珍世界に惚れてると思つて居たのかへ、ホ、、、自惚も大抵にしたが宜いよ。』

『では貴樣は……。』

『當り前さ、お前は妾の爲には何んだね、考へても御覽よ、お前は大事の〳〵女の命とも云はれて居る操を破つた、妾の爲めには敵ぢやないか、お前はどんな事をしたと思ふ、妾だつて、駒澤の家に生れて、千原に嫁つた松枝だよ、青表紙の一二冊は讀んで居やうぢやないか、操の何んたる位ゐは知つて居らうぢやないか、だからこそ、千原に死別た十八歳の秋から、二十二歳の春迄獨身で、他人樣に後指もさゝれないで居たらうぢやないか、それをお前と云ふ畜生の爲めに……お前は忘れたらうさ、けれども妾は忘れないよ、月も日も覺えて居るよ、二月の十二

日の晩お前は何んな事をしたえ、お姑さんがお留守なのを宜い事にして無理無體に……。』

『……。』

今にも打つてかゝるべき勢を示した古川は話此處に至つて、次第〳〵に頭が下り行くのである。

椹枝は尙語を繼いで、

『それ計りでも無い、それからもだ、妾が年が往かないのを宜い事にして、やれ新聞に出すの、阿姑さんに云ひつけるのと勝手な熱を吹いて妾をおどしつけてさ……そりや、たとへ何んなにおどかされてもお前の自由になつた妾も惡いさ、けれども主人とも先生とも、何とも譬やうの無い恩人の奥樣を、無理往生にその操を汚した犬畜生、比べると何方が惡いんだね、その中にお前の胤を宿したのは妾の運の無いのさ……大それた、その上にお前は妾をそゝのかして千原家の財産迄横

領……。』

思はず聲は高くなれば、古川は慌てゝ手を振つてそれを止め乍ら、

『解つたよ、解つてる、俺が惡い、いかにも惡かつた、然し今更そんな事を……四邊にも聞えるぢやないか』と、頼むやうに云ふ。

『何が解つてるんだよ、フム四邊に聞えりや何うするんだね、聲の高いのは妾の性質だよ』と、飽まで罵つて、『ヘン、何處の誰樣が聞かうが構つたもんか……又聞えたつて宜いぢやないか、赤恥かくのはお前計り、妾は何ともあるもんか。』

『だがよ、然し今更そんな事を云つたつて素に歸る事でもなし……俺も今では後悔してる、惡かつたと思つてる、だから今日は……。』

『後悔してる？、馬鹿をお云ひな』と、椹枝は益々猛つて、『後悔してるとはそりや……何處つけやそんな音が出るんだい月々一遍や二遍の墓まゐりに行くのさえも苦い面をしあがつて、後悔したらしい樣にするが宜いぢやないか。』

『えッ？。』

『後悔したらした樣にしろと云ふんだよ、ヘン口と云ふものは重寶なもんさ、何んな事でも言へるからね』と空を嘯いた。

十二　濁酒の香

『口は重寶つて……松枝、俺も人間ぢやないか、……物の善惡位ゐは知つて居らうぢやないか。』

『ホ、、、、飛んだ人間だね、ホ、、、、お前見たやうな人間計りあるから政府の手が拔けないのさ、眞實後悔したらしたやうに、千原の墓の前にでも行つて腹なり喉なり切つてお見せ、ホ、、、、それも出來まい、お前見たやうな意久地無しは……。』

『何？、俺に腹を？。』

『さうよ、言つた處がお前には切れるもんかね、腹を切れや血も出るだらうし、痛いも痛たからうから……。』

云ひ終つて松枝は面をそむけた。

古川はその体に益々急込んで、

『お、、お前は、そ、それは眞實の氣で……』と、吃り乍ら云つた。

『眞實の氣とも、それが當前ぢやないか、然しお前なぞは腹を切るやうな代物ぢやないよ、十八年も連れ添ふて居れや大抵は解らあね、さう云はれて口惜しけりやあ、立派に腹を切つてお見せ。』

『ぢやお前は……。』

『ぢやも、糞も有るかへ、あんまりお前〳〵と云つてお呉れでないよ、これでも素はお前の主人の千原の奥樣、今はお前を養つてる、云はゞ飼主ぢやないか、少しは物の云ひやうにも氣をつけたらよからう、酒を飲む計りが能ぢやないんだぜ。』

『な、何を……お前は何を云ふ、き、氣でも違ひやしないか、何も俺はさうお前に……。』

『又お前と云ふね、これ位ゐ云つても解らないかね、よ〳〵血の廻りの惡い野良猫だよ、お前の爲には御主人だよ、その御主人をつかまいてお前どは何事だへ、貴樣とか奥樣とか云ふのは當前ぢやないか。』

『な、何を……』と、あまりの事に、古川も再び怒り出さんとしたが、さりとてその常に異つた松枝の權幕に、抵抗する丈けの勇氣が出來ない、いつその事、なだめるにしかじと、心中に思案を定めて、松枝の傍にすり寄つた。

『これ松枝、貴女と云へとなら貴女とも云はうし、奥樣と云へと云ふなら奥樣とも云はうが、一体今日は何うしたのだえ、何か俺が惡い事でも……何か感違ひでもして居やしないかね。』

『夏蠅ッ、お退き、』と、松枝はすり寄る古川を突きのけて、『いやな醉漢だよ、濁酒の香なんかさせて……。』

『濁酒？。』と言つたが、古川はニタリと笑つて、『ハ、、、、濁酒は飲まん、今日は久し振りで正宗だ……然し醉つては居んよ』と、尙その傍へ倚らんとする。

『お退きッ！、誰が酒を飲んだ事を聞いたんだい、お前見たやうな醉漢には用はないよ、お退きと言つたらお退きッ！。』

『そ、、さう一概に……。』と醉ふた身の多愛もなく、突き仆されたまゝ、ドタリと尻餅をついて、さう怒るなよ、俺はあやまる、惡かつた處は幾重にもあやまるから……』と手を合はせる。

松枝は、その鋭い眼を、いよ〳〵鋭くして、古川の面を始終白眼つけ乍ら、

『怒るも怒らんも無ないぢやないか、もうお前なんぞには用が無いからサッサと出てお行き、出る度〳〵酒を呑んで歸つて……出世々々もこれで何度だと思ふよ、この野良猫が……。』

古川はグッタリ首をうな垂れて、

『ではお前は、そゝその俺が出世の蔓に有りついたと言ふのを……あまり度々言ふから……眞實にしないんだね、それで怒るんだね。』

『當り前さ、然しそれ計りでもない、お前にはつく〳〵愛憎がつきたよ、だから追出すんだ、出ておじまいッ。』

『出て行けと、ハヽヽそんな、そんな事を言ふなよ、何處の國に女房が亭主を……。』

『何だつて、女房が亭主？、未だお前そんな事を言つて……』と松枝は、煙管を杖に片膝を立てた。

十三　屋根の有る家

『ホイ又これは』と、古川は頭を掻いて、『そんなら奥様だ、奥様、何うぞ今日の處

はお許し下さいだ、そゝその出て行け丈は……』と、松枝を見る。

『何がそんなら奥様だよ、出て往けと言つたら出て行つたら宜いぢやないか、十八年間の辛抱は何の爲だとおもふうんだよ。』

『何の爲……そりやその……。』

『お前の爲と思つては當てはずれよ、お前見たやうな畜生の胤でも妾も血をわけた禮子だ、あれが可愛計りで坊うしてるぢやないか、あれさへなけりや妾は遠くに……。』

『えッ？。』

『宜くお聞き、禮子といふものさえなければ、妾は遠くに、駒澤家に引取れて居るか、谷中の墓地に葬られて居るかの二つだよ、それを彼女が有る計りでお前見たやうな唐變木だ、こりや少し手酷ひね。』

『唐變木だ、こりや少し手酷ひね。』

『手酷いも何もあるもんかね、それで惡けりや與太郎とでも、呆助とでも、於丹珍とでも、お望み次第につけてやるよ、お前のやうな野良猫には、唐變朴でも勿体ない位ゐだよ、この朴念仁ー。』

『こりや酷い、益ゝ出でゝ益ゝ酷だ。』

『それでお前には相當だよ、今日からは兎に角、家に置く事は出來ないから……お前は先刻、出世の蔓に有りついたと言つたね、そんなら尙更の事だ、唐なり天竺なり、三日でもお前見たやうな、野良猫に飯を食はしておく處が有るなら其處へお出で。』

『そゝそんな事を言ふもんぢやないよ、嘘だ嘘だ、白狀すれば、その今日久し振りで友達と逢つて……。』

『もう宜いよ、澤山だよ、お前の言ふ事なんか聞く耳も持ないよ、出てお出でつたら出て行くが宜いぢやないか。』

『俺に？、いよ〳〵か、そゝそんな事を、そんな事を言はないで……これ奥様お願ひだ、お願ひ申すから何卒……。』

『何卒も何もないよ、妾は今日といふ今日は眞實愛憎が盡きて仕舞つたから……出てお行き、妾一人の方は何の位ゐ……今日はそれに用の有る人が來るんだから、お前見たやうな野良猫は居ると見つともないからね……出てお行き。』

『用の有る人？。』

『さうよ、だから、出てお行き、邪魔になるから……。』

『そゝそれは誰だい。』

『誰でも宜いぢやないか、何もお前に逢はうとは言へやしないし……。』

『だつて……。』

『まだ何か言つてるね、夏蠅いッ！出て行けと言つたら、出たら宜いぢやないか。』

強いて出て行かねばなれば、引張り出し兼ねもしまじき松枝の權幕に、せうことな

しに古川はしほ〳〵と立ち上つた。

『何時頃迄に歸つて來りや宜いんだい。』

『勝手にするが宜いぢやないか、何せお前になんかにや用はないから……野良猫は野良猫相當に、塵溜の中の、魚の骨でも拾つてあるいて、何時迄なりと居るが宜いぢやないか、全体お前見たやうな畜生は屋根の有る家に癡るなんて贅澤千萬だあね。』

『ホイ、又、怒られた、ぢや奥様、日暮方に歸つて來ますから……。』

『歸つて來なくとも宜いよ、橋の下にやお前が癡るに似合つた宿が有るよ。』

『……。』

口をついて出る、惡罵に、今は爭ふ丈け、自分の損とあきらめて、力なく〳〵、古川は座を立つて、戸口に行く。

『未だグヅ〳〵してるんだね、さつさと出るなら、出たら宜いぢやないか。』

叱るが如き松枝の口調に、入り口に突立つた儘、ポンヤリして居た古川は、ハッと首を縮めて生久地なくも出て行くのである。

十四　暗から暗

大風の止んだ跡のやうだとは蓋しこんな事を云うんだらう、古川が出て行つた跡の松枝は、腮を深く襟に埋めて、ジーと考へ込んだ。

『如何したんだらう、昼飯を食べたら直ぐ來ると云つて居つて……』と云つて、長火鉢の縁に肱を倚せた。

切れの身い眼、尋常な鼻、紅の唇、頬こそ少しこけて居れ、年こそ少し老けて居れ、さりとて仲々捨てがたい……四十歳とは何うしてもうけ取れない顔付。

火鉢に面をくべるやうにして、暫し考へて居たが、急に面をあげて、

『あ〳〵つまらない、何故妾はあんな古川見たやうなものに……たとへ、いくら新

間に出すの、阿姑さんに告げるのと云はれたにせよ、何故身を任せたらう。』

去つて居る中に、見る〳〵眼はうるんで來た。

『それはさうと、芳樹は何うしてるんだらう、もう、かれこれ十年以上を……千原家を出てから、一度逢つた切り……嘸妾を恨んで居るには……いや〳〵、もう芳樹はこの阿母さんなどは、思ひ出しもすまい、忘れて居るんだらう、忘れて居るに相違ない、もう今年は二十二歳だのに、今迄我慢して居ると、何處迄も芳樹の阿母さんで威張つて居られたに……あゝ妾は馬鹿だ、馬鹿だつた』と、ぶる〳〵と身を慄はする途端に、瞼毛を傳はつた涙は、炭火の上に落ちて、チユーと音を立てた。

『あゝ、厭だ〳〵、何故妾はあの時死んで仕舞はなかつたらう、腹の中の禮子は暗かゝ暗に葬つても、真女の名は立てられたのに……今死んだつてとてもその申わけには……あゝ厭だ、あんな親切な阿姑さんの事をわけて頼んで下さるのを聞き

入れないで、出て來て……。』

漠は、次第〳〵にその流れを早めて、雨の如く、火鉢に下る。

桜枝はツト身を引いたが、それを拭はうともせず。

『然し、さうは云ふものゝ、あの場合どして妾、何うしても阿姑さんの言ふ事を…………とてもあんな身体をして、のめ〳〵と千原家に居られなかつたもの……、芳樹だつて……、芳樹だつて、かゝ可愛いくないわけでは……可愛くて仕方のない芳樹を振りすてゝ出たのも、みゝ皆古川の爲だ、憎のは古川……』と云つたが、

『いや〳〵、古川計り惡いのでもない、妾も惡いのだ……然し妾あの時は何うしても千原の家には居られなかつたもの……、お腹はふくらんで來る、實家の阿父さんには知れる、わゝ妾は、こゝ心を鬼にして、鬼にして……せめてこの上千原家の家名だけも、傷つけまいと思つて出たんだから……何も知らない芳樹は嘸鬼のやうな母だと思つて……然し今更こんな事を芳樹に云つた處で、所詮與實にする氣

遣ゐはなし……妾何うしたら……』と、その儘、そこに突伏して、涙も盡きよと計り泣くのである。

外は、如何やら、空が曇つて來た樣子、風がビユウッ〳〵吹き出して來て、今にも雪が降り出さん模樣。

共同井戸の釣瓶の繩の車をきしる音迄がなんだか、寒を添へるやう。

障子の破れ目をブル〳〵と慄はして吹き込む風に、『オヽ寒む』と、涙を拭いて、立ち上り樣、松枝は外を眺めて。

『未だ來ないかしら』と、首を延ばしたけれども、人影も見えないので、其處等に散らばつて有る前かけで、障子の破れ目を塞いで、又素の座になほり、泣くのである。

隣の區役所の書記の家の、時計が一時を報じた時、滯板を渡る靴の音がした、『オヤ』と云つて、おはてゝ涙を拭つて耳をそばたてる時、靴の音は益々近いて、

『叔母さんいらして？』と若々しい聲。

十五　畫端書屋

『はあ、居りますよ』と云ふ間も有らせず、飛んで出て、格子を開けると、外には海老茶袴の禮子が立つて居る。

『さあお這入り、先刻から待つて居たの』と、松枝はニコ〳〵して迎へると、禮子も亦笑を含んで會釋し。

『もう少し早く參らうと思つたんですけれど、今日は生憎十九日にやる演奏會の相談が有つたもんですから……。』

『オヤ、さうかい、まあ〳〵御這入り、外は寒いから』と、先きに立つて松枝が導くまゝに禮子も、その後につゐて六疊の間に通つた、松枝はいそ〳〵と、布團を出して敷かせ、茶など出してすゝめ乍ら。

『けれどもまあ宜く來られたのね』と、なつかしさうにその面を打ち眺めた。

禮子は、山繭織縞の、書生羽織の裾を拂つて、その愛嬌の有る、丸顏に、針の先きを突いた程の笑凹を浮ばせ、

『はあ――妾も始終御尋は致し度いので御座んすけれど、何うも阿母さんや、阿父さんが厳しいもんですから』と云ひかけて、ハッと口を噤む。

『それもさうだらうね』と、松枝は太息して、

『阿母さんの御病氣は？』と問ふ。

『祖母さんですか、あのおかげ樣で……咲持の事ですから、冬分になると何時でもあゝなんですけれど、今年は……然し今ちや、よほど全快なつて……。』

『さうや宜い具合だね、蔭で妾も種々心配して居るんだけれど、さらばと云ふてお見舞に行くわけにも往かず……』と、早や松枝の辭はうるんで來た。

『……。』

禮子は、默つて返辭もしないで居つたが、松枝の容子に氣がついて、

『時にあの叔父さんは』と、話を他にまぎらはさうとした。

『叔父さんて、あの古川？、今追出してやつた處よ。』

『追出して？。』

『あゝ、今日もね、朝つぱらから出かけて、今し方、グデン〳〵に醉拂つて來たの……それでなくてさへ妾、種々な事を考へてムシヤクシヤして居つた時なんだから、思ふ存分今日は油をとつてやつたよ、するとね、今出て行つた計りの處さ。あんな人つたら眞實に……又何處かで飲んで居るだらうよ……あの禮子さんは來る時逢はなくつて？。』

『いゝえ』と、禮子は頭を振つて『ではあの叔父さんは未だお酒をお止しになりませんのね』と、眉をひそめて、松枝を見上げた。

松枝は默頭いて、

『あゝ、未だ止さないとも、古川なんかは遂にお酒に命を取られる方なんだよ、此頃はね、方々の繪端書屋に頼まれて、畫くんだけれど……最も僅かな染筆料だがね……それを皆お酒にかへて仕舞ふの、だから一日だつてお酒の香のしない事は……。』

『でも、あの叔母さんは……それをお止めなさらないんですか。』

『止めないともさ、又よしんば止めた處で他人の忠告を聞くやうな代物ぢやないんだからね……、あんな動物は早く血でも吐いて死んで呉れりや宜いのさ。』

『まあ……』と、禮子は呆れる。

『ホ、、、』と松枝は笑つて、『ほんにさうだつけね、妾には、い、くら敵のやうな古川でも、禮子さんの爲には、あれでも血をわけた、阿父さんだからね、ホ、、、と　　　　　　　　　　　　　んと忘れて居たよ、御免なさいよ。』

『あらッ、そんな事は妾……妾そんな事は何とも思ひやしませんけども……』と、矢

張氣になるかして、禮子は、白い襟足を惜氣もなく見せかけて、少し首を垂れた。

『然しそれも無理は無いね』と、腹の底から絞り出すやうな太息をして、松枝は『たとへ何んなでも、古川は男、禮子さんは、こんな生久地の無い妾よりは、酔漢でも古川の方が……』と、ホッと又溜息。

十六　四ッの袖

『まあ……、妾如何してそんな事を』と、禮子は慌たゝしく面を上げて松枝の言を遮つた、松枝は早や眼のふちを赤くして。

『禮子さんはさう云ふけれども……、さうお思ふのも無理は無いよ、道理だよ、表向きは父と云ふ事も出來ないんだけれども、内秘は、何處迄も、父は父、娘は娘禮子さんの爲には血をわけた父に相違ないんだからね。』

『然し阿母さん』と云ひかけてあはてゝ禮子は我と我が言を打ち消し、『然しなんで

すね、いくら盛をわけて頂いたつて……そりやいかにも父とは呼ばなけりやならないかも知れませんけれど、道理に二つは有りませんから……惡い人は何處迄も惡い、善い人は何處迄も善いんですね、だから阿母さん……。』

『それも……』と松枝は少し口籠り、然し禮子さんだつて人間だもの、あんな者でも古川は阿父さんだらう、妾の前でこそ、さう云つて居るだらうが矢張……それが人情だわ。』

『……。』

『けれどもね、それにつけても禮子さんに宜く呑み込んで頂かなけやならないと云ふのは、何時も云ふ通り、妾は古川の爲に、斯んな目に逢つてるんだから、それ丈けは何卒忘れないで……これは妾が禮子さんに一生の御願ひだよ。』

『あら、そゝ、それは何うして妾……妾何時も來る度びに聞いてるんですもの、何うして忘れるもんですか、叔母さん、妾は死ぬ迄忘れはしませんよ。』

『さう?、そんなら宜いけれども……然し妾は決して禮子さんに、古川へ無情く當たれと云ふわけではないんだよ、妾が醫何時死んだつて……妾の爲には古川は敵だけれども、禮子さんの爲には阿父さんなんだから……つくす丈けは盡してね、然し、女と云ふものは、皆、惡くすれば妾見たやうな眼に遭ふものだと云ふ事を宜く腹に入れてね、でないと、お前さんだつて、又何うゆうはづみで妾の二の舞をしないとも限らないもんだから……。』

『は、それは充分……ですけど、そんな……死ぬなんて、そんな縁喜でもない事を……。』

『そりや妾も云ひ度くはないさ、けれどもね、妾は……妾は、い、今死んだつて殘惜しい事は無い身体なんだも……ならう事なら今死んで仕舞い度いよ。』

『あら、そんな事を……叔母さんは……お止しなさいな。』

『止せと云へば止しもしやうけれども、然し妾は、も、、もう、こ、此の世に堅

みの無い身体なんだよ、今迄生き長らへて居たのといふのは、禮子さんや、芳樹さんの生長を見たい計りで……』と、途切れ〳〵に云つて、果ては松枝は涙をハラ〳〵と流した……。

『……。

禮子も只、眼をしばたゝかせる計りで、何とも云はない、二人は無言で、暫く共に首を垂れて居たが、やゝ有つて、松枝は、湧き來る涙を、粗末な、キャラコのハンカチで掩えて、

『ね、禮子さん、眞實に妾の身になつて見ておくれよ、げ、げ、現在の娘を、む、娘とも呼ぶ事が出來ず、よ、芳樹は尙更の事……何が此の世の中に面白い事は有つて生て居やうよ……今迄生きて居たのといふのは皆、お前達二人のそれ〳〵身の倦まりがつくのを見て死にたいと……それに計り、み、み、未練が殘つて……さうでないと、阿父さんの云ふ通り遠くの昔に、谷中のお墓の前で、の、の、咽

でも突いて……。』

『あら、もう〳〵、そんな事は……。』

『妾も云ひ度くはないよ、けどもね、さうぢやないか、考へても見てお呉れよ、禮子さん、それが無理だらうか、さう云ふ、わ、妾が無理だらうか……。』

罪に泣く松枝の涙、不幸に泣く禮子の涙、共に珠をなして、その膝に落ちた。二人の涙、四つの袖、それよその四つの袖はそれを拭ふべく、あまりに短いのである。

十七　螢野の雨

やゝ有つて、松枝は涙を拂ひ、

『ねえ、禮子さん、譬へ犬に生れて來やうが來世には、女に生れて來るんぢやないよ、お前さんなどは、未だ世の中も知らないから……見たと云ふても學校の窓が

ら見た位ゐなもんだから……世の中には、何の位ゐ荒い波風が起つて居るやら知る筈もないけれども――兎に角女は損だよ、だつて、石の上に轉ばす卵のやうな破れやすい、節操といふものを、それ〳〵生れて來る時持つて來るんだもの……そりや世の中には隨分愛が何うだとか、戀が何うだとか、嚴しく云ふ人達が出來て、種々な理屈を云ふけれども、然し理屈は理屈さ、實際は實際だからね、女の操と云ふものは、一度汚されて仕舞ふと、跡はいくら、あがいても駄目なんだよ、腐朽の入つた木は、何んな宜い大工が使つたつて、柱にも梁にもならないんだからね……。』

『は、あ、、有難う存じます、よ、宜く解りました。』

『だからね、これからお前さんなぞも、厭な世に中に、何うしても出なけりやならないんだから、餘程注意しないと……親切らしく見せかける人に限つて、羊の皮を被つた狼なんだから……妾なんどは現に、そ、、その……その狼の爲めに……

げ、げ、現在血をわけた芳樹の顏も見る事が出來なくなつたんだもの、お前だつて、一人の兄さん……それを兄さんと呼ぶ事も出來ず……だからね。』

『は、はい、叔母さん、妾は何時迄も貴女をお、、阿母さんと……阿母さんと云ふ事が出來ないんでしやうかねえ。』

『そ、それは……禮子さん許してお呉れよ、妾だつて、お前さんは一人の娘だもの……然しそれもこれも浮世の義理といふもんが有つて……禮子さん、さ、さぞ、お前さんは、此の妾を、う、う、恨んで……禮子さん、ゆ、許してお呉れよ。』

『まあ、何うして妾、あ、貴女を恨むなんて、そ、、そんな事が……。』

『禮子さん、妾だつて、お前さんに阿母さんと呼ばれたいのは山々だよ、然しね、それが出來ないのは……恨むなら何卒古川を恨んでお呉れ……ふ、ふ、古川はお前の爲にも妾の爲にも、憎い〳〵、あ、惡魔なんだからね……。』

『……。』

『然し禮子さん』と、眼を掩ふた儘、松枝は崩れかけた居ずまいを直して、『然しさうは云ふものゝ、冗いやうだが、お前の爲めには、古川は阿父さんなんだから……禮子さん、おゝお前は……古川に悔悟させる役目はお前にあるんだよ。』

『は、はい、けども、阿母さん……阿母さんはさう仰しやるけれども……古川は何うしても妾の父と呼び度くはないんですもの……。』

『それも……それも尤だよ、では禮子さんも、それでは矢張り……。』

『だつて、あのう、妾考へれば考へる程、勿体ない事ですけど、ふ、ふ、古川が憎くつて……阿母さん……叔母さん……わ、わ、妾千原に何度行つても、よゝ芳樹さんは妾に逢つて下さらないんですもの……』と云つて、今は絶えかねてや聲を上げて泣いた。

『え、あの芳樹さんが……。』

松枝は、涙の眼をそらして、禮子を見た。

『はい、わ、わ、妾、父は違つても兄さんだから……逢ひ度くつて〜〜……之迄何度訪ねたか知れませんけれど……ハ、ハ、何時もお留守で……あの今迄は……。』

『では、芳樹さんは、お前が……お前が行くと、る、留守をつかうんだね。』

『それは、何うか解りませんけれど……妾、一人の兄さんを兄さんと云ふ事も出來ず、逢ひ度くつても、逢つて下さらないのを見ると……阿母さん……叔母さん……わ、わ、妾、ど、何うしたら、兄さんに逢へるんでしやうね、阿母さん……。』

涙もせで來て、濡れかゝる、萱野の雨、座は只、すゝり泣きの聲計り、炭の香は高く薫するのである。

十八　阿鼻焦熱

『でも阿母さんは？、矢張逢つて呉れないの？。』

『それは叔母さん……お祖母さんは逢つて下さるんですけれども……お祖母さんは

『然し禮子さん』と、眼を掩ふた儘、松枝は崩れかけた居ずまいを直して、『然しさうは云ふものゝ、冗いやうだが、お前の爲めには古川は阿父さんなんだから……禮子さん、おゝお前は……古川に悔悟させる役目はお前にあるんだよ。』

『は、はい、けども、阿母さん……阿母さんはさう仰しやるけれども……古川は何うしても妾の父と呼び度くはないんですもの……。』

『それも……それも尤だよ、では禮子さんも、それでは矢張り……。』

『だつて、あのう、妾考へれば考へる程、勿体ない事ですけど、ふ、ふ、古川が憎くつて……阿母さん……叔母さん……わ、わ、妾千原に何度行つても、よゝ芳樹さんは妾に逢つて下さらないんですもの……』と云つて、今は絶えかねてや聲を上げて泣いた。

『え、あの芳樹さんが……。』

松枝は、涙の眼をそらして、禮子を見た。

『はい、わ、わ、妾、父は逆つても兄さんだから……逢ひ度くつて〳〵……之迄何度訪ねたか知れませんけれど……ハ、ハー何時もお留守で……あの今迄は……。』

『では、芳樹さんは、お前が……お前が行くと、る、留守をつかうんだね。』

『それは、何うか解りませんけれど……妾、一人の兄さんを兄さんと云ふ事も出來ず、逢ひ度くつても、逢つて下さらないのを見ると……阿母さん……叔母さん……わ、わ、妾、ど、何うしたら、兄さんに逢へるんでしやうね、阿母さん……。』

骨もぜで來て、濡れかゝる、萱野の雨、座は只、すゝり泣きの聲計り、炭の香は高く薫ずるのである。

十八　阿鼻焦熱

『でも阿母さんは？、矢張逢つて呉れないの？。』

『それは叔母さん……お祖母さんは逢つて下さるんですけれども……お祖母さんは

大層親切にして……此間の晩もまゐりましたら、今に芳樹さんが歸つて來るだらうから、待つて御出でつて……それは〳〵可愛がつて下さるんですはけれど。』

『それでは、その晩も芳樹さんに逢はなかつたの？。』

『はあー、九時頃迄待つて居つたんですけど……九時過ぎても歸つて來なさらないんですもの……。』

『では……。』

『は、だから、所詮兄さんは妾にお顔を見せでは下さるまいとは思つて居りますけれども……それでも矢張、何んな方だか、一目お眼にかゝつて……お話なぞは、勿論して下さらないんでしやうけれども……お顔だけでも……。』

『ど、、道理だよ、お前がさゝお思ひなのも……妾なんかも、よ、、芳樹の顔が見たくつて〳〵、此間もあの邊に行つて何度、千原家の前を行き戻りしたか知れないけれども……。』

『あの叔母さんも……ぢや此間芝にいらしたんですか。』

『あ、、もう先月の事よ、たしか先月の二十八日の日……二十八日は芳樹の阿父さんの命日だから、お墓まゐりをして……妾が今のやうな身分になつたのも、何も好き好んで斯うなつたわけでないんだから……魂と云ふものは有るならば……芳樹さんの阿父さんの魂が妾の胸中を知つてお出でになるならば屹度逢はして下さるに違ゐないと思つて、お墓から直ぐ家に歸らないで、其儘電車で、行つたけれども……せめて顔が見えないならば、聲丈けでも宜いから聞き度いと思つて、あの邊を一時間あまりも、ウロ〳〵して居たが……聲もなんにも……。』

『おや阿母……叔母さんも……。』

『さうよ、これはよく〳〵親子の緣が無いのだらうよ、さうでもなけや……神も佛も慥かに有ると云ふ人も有るのに……逢はれないんだもの、最も緣が無ければこそ、五歳になる迄手塩にかけて育てた芳樹を手離しゝて、斯んな風になつたんだ

らうけれど……。」

跡は得云はず、咽せ返るのである。

「では阿母さん、現在の阿母さんでも、縁が無くて、兄さんに逢はれない位ゐなら、まして古川見たやうな父を持つた妾なぞは……阿母さん、妾は一生兄さんを、兄さんとも呼ぶ事が出來ず、お顔も見る事が出來ないんですのね。」

腸を断つ禮子が悲慘の聲音、松枝は、阿鼻焦熱の地獄に陷ちたよりも苦しい思ひのするのである。

「そゝ、そんな事は……お前なんぞは、生い先きの長い身躰だから、何時何んな處で、逢はないとも限らないけども、……然し禮子さんは妾よりは幸だよ、妾よりは……。」

「な、何故ですの、そゝそんな事は……。」

「だつて、禮子さんは阿姑さんに……お祖母さんにやさしいお言の一つもかけて貰う事が出來る身の上ぢやないか、妾なんぞは……產の親兄弟にも……阿姑さんには勿論逢はれた身躰ぢやないんだもの……。」

「けどあの阿母さん、あの、此間なんぞも、お祖母さんが妾に、阿母さんに逢つたら宜しく云つて呉れと仰しやつた位ゐですもの……お祖母さんにお逢ひなさる分には……。」

「だから猶更の事だよ、さうお祖母さんが優しく云つて下さるにつけても……よしんば妾が斯んな身の上になつたのは眞實の妾の心から出たのでないにせ、五つや其處らの芳樹を鬼々しく老先きの短いお祖母さんに預けて……妾、お祖母さんにさう仰しやられると猶更、義理にも千原家に行つて、阿祖母さんのお目にかゝるわけにはゆかないんだよ、だからね、わ、わ、妾は、じゝ、死んでからでなけりやとても……」と、又伏し沈む。

十九　其時は吃度

『お、お、叔母さん死ぬなんて、そんな悲しい事は……死んでからなんて……。』

『そりや、妾だつて、こんな事を云つてお前を泣かしたくは無いんだけれど、あ、あんまり悲しいもんだから遂ね、辯辯してお呉れよ。』

『い一え、何も妾……只あのそれでなくてさへ、悲しくて成らないんですから……叔母さん妾も隨分不運ねえ。』

『さうよ、然し妾はあんな惡い事をして居るのだから、體へ何んな悲しい思ひをしてもかまはんけれど、何も知らない……何の罪も無いお前に迄、悲しい目に逢はせるかと思ふと……禮子さん、ゆゝ許して……。』

松枝は其處に泣き崩れるのである。

禮子は、松枝の背に涙を注ぎ乍らハ、慌てゝ抱き起して、

『叔母さん、何卒泣かないで下さいな、もう妾も泣きませんから、わ、わ、阿母さん、わ、妾も泣きはしないんですから……。』

『あゝ、宜いよ』と、松枝は僅に身を起して、

『妾だつて、禮子さんにさう云はれる迄もなく泣かない氣になつて居るけれども、禮子さん、な、な、涙が……。』

『そ、それは、ご、御尤ですわ、然しもう阿母さん……叔母さん泣かないで下さいな、いくら泣いたつて、嬉しい眼に遇ふではなし、何うせ、阿母さんも妾も、一生嬉しいと思ふ事が無くて、くゝ暮らすやうに生れて來たんですから、ね、阿母さん、何卒……。』

『あゝ、もう妾も泣かないよ』と、松枝は眼にハンカチを當てた儘、すゝり上げて禮子さん、妾はね、妾はたゞへ打たれても、唾を吐きかけられても宜いから、も一度、芳樹さんの顏が見たいんだよ。』

『それは阿母さん、妾だつて同じ事ですわ、けれども……然し長い月日の中には、何日かは遇はれない事も有りますまいから、それ迄お待ちなすつて……。』

『そりや待つて居て遇ふ事が出來るなら、十年でも二十年でも辛抱して居るけれども、な、な、何も罪の無い禮子さんに迄遇つて呉れない芳樹さんだもの……妾になんぞは……。』

『そんな事は有りやしませんわ、い、い、今こそ、兄さんは、彼樣でしやうけれども、何時かは阿母さんの罪の無い事を御存じになる時が有るでしやうから、その時は吃度……、阿母さんそれ迄何卒御辛抱なすつて……、妾もその時迄待ちますから。』

『さうね、それは芳樹さんだつて、今こそ妾を恨んでも居やうが、ほんに、お前の云ふ通り、何時かは……。』

『全くですよ、云はゝ今の兄さんは、雲でかくされたお月樣、風でも吹いて雲の取れる時も來ましやうから……ね、それ迄阿母さん。』

と禮子は、、、スリ赤めた眼をハンカチから離して、母の身躰をゆかぶると、此時迄、前後不覺で泣き伏して居た松枝も急に目を覺めと氣付いて、ツイと身を起した。

『ホ、、、』とわざと泣き笑ひをし『眞實に妾とした事が、……まあ何うしたんだらうか、幾何悲しいたつて……勘辨してお呉れよ』と、泣き脹らした眼で、ハンカチの間から禮子を見た。

『あら、そんな事が……勘辨だなんて……ね、もう阿母さん、斯んな話は止しましやう、幾何話したつて、何うもなりやしないし……只泣き度くなる計りなんですから……。』

『さうね、濟まなかつたわ、偶ま〳〵來る者に斯んな話をして……もう妾もしないよ、妾も云はないからお前も……』と又泣き倒れる。

『は、妾だつて阿母さん……あら又……』と、禮子の泣き狀す松枝に釣り付いて、

『阿母さんはさう仰しやるけれども、矢張その通り泣いていらつしやるですもの……もう泣かないで』と頼むやうに云ふ。

『いーえ、わ、わ、妾泣いてるんぢや無いの只、その……、あんまり泣いた故か眼の緣がビリ〳〵して……。』

泣かじと松枝は齒を喰ひしばれど、一度開いた涙線の樋の口は仲々閉ぢさうも無い。

二十　浮世の義理

今は禮子も止むるに由なく、共に〳〵に泣くに宜いだけ泣くのである……母松枝の身躰に身を投げかけた儘。

もの〳〵、二三十分の間は、二人共一言も言を交ちへないで、泣いた、かくして互に涙の盡く時分、共にしやくり上げながら云ひ合はした樣に身を起した。

『禮子さん、もう妾も泣かないから、お前もお泣きでないよ……折角倆に來て呉れたものを泣かして……皆な妾が惡いのだから許してお呉れよ。』

『そんな事は阿母さん……許して呉れのなんのつて、親子の間で……、もう〳〵何も仰しやつて下さいますな、阿母さんにさう仰しやられると妾、つ〳〵、遂悲しくなつて來て泣き度くなりますから……。』

『だつて妾が惡いんだもの……醫へ親子で有らうが……今はお前は兄樣の娘になつてるんだもの……。』

『あらまた……水臭い、幾何誰れの娘になつて居たつて、それは表向きの話、內秘は何處迄も、貴女は妾の阿母さんぢやありませんか。』

『それはさうよ、けれども……。』

『では阿母さんは妾を娘……妾に阿母さんと呼ばれるが厭やなんですね、阿母さんと云つてはいけないと仰しやるんですね。』

禮子は恨めしさうに、母松枝の顏を見上げた。

『いゝえ、そんな事は』と枯枝は頭を振つて、妾だつてそれはお前に阿母さんと呼ばれ度くない事は無いよ、けれどもそれでは……。』

『そんなら宜いぢや有りませんか、義父さんだつて、義母さんだつて、表向きはあんな事を仰しやつていらつしやるけれども……此家で貴女の事を阿母さんと云つたつて、それ迄は……又それも惡いと仰しやらうが、此場限りの事ですもの。』

『さう云へばそんなもんだけれども……然し實を云へや妾、お前に阿母さんと云はれるのが何よりつらくつて……。』

『え？、何故ですの、誰が何と云はうが貴女は妾の阿母さんぢや有りませんか……では何か妾が阿母さんに……。』

『そんな事は無いんだよ、けどね、只その、お前のやうな罪も汚れも無い……清い潔いお前に、斯んな汚れた妾を阿母さんと呼ばせるのは、何とも妾が心苦しくつて……。』

『まあ、汚れた〳〵と仰しやるけれど何も阿母さんが……。』

『いーえ、それはお前は阿母さんだと思つて妾を見るからさうなんだですよ、眼でない方から見れば……妾でさえも妾の身躰の腐つた事も、根生の汚れて居る事も解るものだから……。』

『まだ阿母さんはそんな事を仰しやるんですね……嘸へいくら汚れて居なすつたつて宜いぢや有りませんか、妾さえ宜かつたら。』

『さうは往かないよ、これでも妾、多少は良心とかいふものが有るんだからね、だから……お願ひだから、これから何處迄も妾を叔母さんにして……。』

『けれどもそれは無理ですわ、そりや貴女が阿母さんと云つちや惡ないと仰しやりや妾だつて云えやしませんけれど……だつて阿母さん、妾の身にも成つて見て下さいな、現在産みつけて下すつた方を阿母さんと呼ぶ事も出來なかつた日にや……。』

『それは充分察して居るよ、けれどもね、浮世の義理と云ふものも有るし。』

『ぢや何うあつても妾阿母さんを叔母さんと云はなくちやならないんですか。』

『あゝ、だから浮世と云ふものはつらいもんだと云ふんだよ。』

『さうよ、妾、もうあきらめて居るから……。』

『阿母さん、ぢや何うしても貴女は妾の叔母さんだと仰しやるんですね。』

『それもこれも皆妾が惡いのだよ、勘辨して……。』

相擁して、二人は亦もや悲歎の涙に暮れるのである。

二十一　美しき八字髯

今し方年始の客の歸りし計りのことゝて、盃盤狼籍の十疊の間を、妻の阿律は、下女のお梅を相手に、片付けて居るのを、ほろ酔機嫌の直彌は、座敷の隅に畏まつて見て居る處へ、今迄隱居處に行つて居つた禮子がツカ〳〵と入つて來た。

入口に立つた儘。

『あの阿父様、お祖父様が一寸來て下さいつて。』

『俺に？』と、直彌は紙卷の吸口を、腮にあてて其方に振り向く。

『は、用が有るなら何だけれども、でもなけりや直ぐつて……。』

『さうか、宜し今行くよ……未だあの祖父様達は御寢みにならないか。』

『は』と、答も輕く、禮子は義母のお律と共に、德利や何かを抱えて勝手に行く。

『何の用だらう』と、柱にかけてある時計を見上げて、『オヤ〳〵十時になるのに……』と呟きつゝ、口を切つた大和の箱を袂に入れて、その儘南側の縁に出で、庭下駄を鳴らし乍ら、別室の方へと出て行つた。

幕府時代には小大名とは云へ、兼て内福の噂高かりし某國の藩侯の別屋敷、今は此の時代の面影を、百分の一も殘してはゐないけれども、尙金助町の駒澤の邸と云へば、本郷附近にては、あゝ彼處かと首肯く程有名な庭園。

世人に知れて居る處は、一萬二千坪と云ふにあれど、事實はそれよりは餘程廣いらしく、數千圓の石燈籠、數百圓の假橋の擬寶珠、それは維新の改革騒ぎの時、一束三文に賣り拂つたとやらで、新らしい安物がその跡を相續して居るけれども、樅、柏、松、梧桐、銀杏樹等の喬木は、各數百年のほこりを、パッと廣げし枝に現はしつゝじや、槙は、それにまつわる藤の太さに依つて、その年代が思ひ出さしむるに足るのである。

瓢形の水青き百坪あまりも有らうと思はる池は、岸邊に立てる柳櫻の水鏡となり、湧生ひ茂げる馬の背のやうになつて居る築山は、麓を廻るいさゝ小川に木の葉の舟を浮べ幽かに咽ぶやうやれ音を見下して居るかのやう。

東に筑波、南に富士、築山に登れば晴れた日には、いづれなりと御隨意と云つた姿、所謂低唱淺酌、四季に可なりの邸である。

庭をグルリ廻つた直彌は、後庭に境する枝折戸を開けて、そよ吹く風に醉氣をさま

しつゝ、梅、櫻の數々左右に生ひ繁る、隱居所への通ひ路を進るのである。

母屋を離るゝ事、二百歩あまり、突當つて右は小さな築山、左は大池に水の出口のつゞく小池、後はズーと、二百坪あまりの小松原があつて、木蓮と椿との生垣に圍はれた十五六坪もあらうと思はれる處に一寸洒落た平屋。

これは駒澤孝祐夫妻が、餘生を送る隱居所なのだ。

『阿父様、直彌がまゐりました。』

父子の間とは云へ、親んで狎れざる武士的教育をうけた直彌、中天に皓々の光を放つ玉兎に、美しき八字髭の有る赫顏を射らせ乍ら、戸の外に立つた。

『あゝ、直彌か、這入るが宜い、ハゝゝ、遠慮は無用ぢや、外は中々冷えるぢやらう。』

丈夫な力の有る聲は、家から響いた、と思ふとそれに續いて、母の咲子も。

『早く這入つたが宜いぢやないか、風でも引いたら何うするの……この寒空に……

火は起きて居るよ……鑰もかゝつてない筈だから、直に開くよ』と云ふ。

『はい、それぢや』と、直彌は格子を開けて中に這入つた。

林の中には、時々物凄く、吠えるやうな梟の聲。

二十二　雲烟看過

眞僞の程は知らねど、應擧と落款のある竹林の虎の一軸をかけてある床の間を背にし、漢籍らしい和裝の本を堆積して居る蛸足の桐の机に肱を寄せて、七分心の器械洋燈と、陶器の丸火鉢とを間に狹さんで少さな丸髷を頭に藏せて居る喫子と、相對して居るのは、父の孝祐。

お若いと賞めこのは、萬更出入りする人々のお世辭計りではなく、髮こそ白いが、髮こそ白いが、何うして〳〵、骨組み肉附き、仲々壯者も凌く躰軀、無圖と純子の布團にかゝれた胡座の姿さ、これが來年は七十五になるといふ老人とは何うしても受

け取れぬ。

これに反して、老母の喫子は、五歳劣りにしては大した老けやう、額には皺、洗の腰は少しく弓狀になつて、五歳下處か夫の孝祐よりは五歳も年上の樣だ。

出し與へた座布團に畏まる直彌に、孝祐は火鉢を押やつて、

『もう晩いも晩いから、火は別に取らんから、ズーと此方へ倚るが宜からう』と云ふと、喫子も。

『寒いから、火鉢の傍にお倚り』と、すゝむるに、直彌もズーと進んで、其儘手をかざした。

『時に、何か御用だと承はりましたが』と、老父母の顏を見る。

『まあ、用と云へば用さ、遠くに濟んだ事だが一應お前にも話した方が宜からうと老婆が云ふのでのう。』

『へい、遠くに濟んだ事と云ふと？。』

『それは追々話すがね』と、咲子に茶を汲ませて、自分も飲み、直彌にも進め、『それと云ふのは外でもない禮子の話だがね。』

『禮子？、禮子が如何かしたんですか。』

茶碗を唇に當てゝ、直彌は父を見返した。

『さうさ』と、父の孝祐は默頭いて、『それは外の事でもないが……今日正午過ぎると間もなく禮子が來てね、俺からお前に禮子を勘當をして呉れるやうに云つて呉れいと、斯う願ふのぢや。』

『えッ禮子が……。』

『あゝ、ハ、ゝ、ゝ、何もさう驚く程の事ぢやないがね……で俺は種々と聞き正したよ……世には勘當を許して呉れと血の涙を流して願ふものさえ有るのに、お前は又何とした事だ、大恩有る親に勘當をうけ度いと云ふのは、氣でも狂つたかと、俺はさうは言はんけれど、老婆がさう言つた。』

『だつてね、直彌、何が何んでもあんまりな事を云ふんだもの』と、咲子は口を出す。

『まあ〳〵お前は默つてるが宜い』と、孝祐はそれを差止めて、『それでね、俺もその不心得を論したんだ、すると、強いても云ひかねて其儘歸つたが、先刻來た時は思ひ返したと見えて、先程のやうな事を云つたのは重々惡かつたから……今後はあんな事は決して口にしませんからと云つて詫びてのう。』

『へい。』

『それでぢや、お前は此の問題を如何解釋する氣ぢや、思ひ止まつたと云ふのを楯にして、その儘雲烟看過して仕舞へばそれまでだけれ共、さうは往かんてのう、一度有る事は必ず二度有る、今度は思ひ止まるものとしても此後又、何んな事を云ひ出して、家を飛び出すやうな事がないとも限らんもんぢやから、それでお前の所存も聞かうと思つて、わざ〳〵此の夜更けに呼んだわけぢや……お前はその

勘當云々と云ふのは、禮子の心の底から……本心から出たものとするか、乃至は他人に勸められたのと見るか、何う解釋するね』と、老父は、疑然と直彌を見つめた。

『ちや、そんな事を禮子が貴方に云つたんですね』と、直彌は少し聲を強めて、『阿父さん、私は、これは禮子の本心から出來た事ではなく、必ず何者かの教唆したのだらうと思ひますが……貴方は何う』と云ひかけて、矢張父の顏を見上げた。

二十三　泣いじやくり

『お前もさう思ふかね、俺も何うもさう思はれてのう、最も禮子は自分が考へる處が有つてだと云ふけれども……。』

『そりやさうですよ、何ぼ何だつて、十八歳や、十九歳の小娘が、そんな事を云ふ丈けの度量があるもんですか、だから妾、これは屹度……ねえ直彌』

『さうですとも、誰が何と云つてそれに違ゐは有りません……して阿父さん、禮子は何が故に私から勘當をうけ度いと云ふんですか。』

『さあ、それは俺も隨分問ひ質して見たが』と云ふと、老婆の咲子はその跡を引きとつて。

『妾も散々問ふたのさ、隨分お祖父さんの仰しやる通り、次第に依つては妾も阿父さんに願つて勘當させてやるやうにするが、然し勘當をうけ度いと云ふには必ずそれ丈けのわけが無くては成らん、その譯を云つて、妾等が成程と呑込めたらと、』

『斯う云つたけれども何うしてもね。』

『ちや、わけも云はずに禮子は？。』

『無論の事さ』と、孝祐は銀張りの煙管に、福壽艸（莨の名）をつめ乍ら、『これが斯うしたわけだとか、或は阿父さんや、阿母さんがつらく當るど云ふのなら。』

『そりや阿父さん、お思ひ違ゐです、私にしても、お律にしても、幾何產さぬ中、

血をわけない中でも、そゝそんな事は決して……決して有る筈は……。』

『いや、それは充分俺も知つて居る、又譬へ禮子がそんな事を云つたつて信じもしないが、然しだよ、假りにさうゆう事が有つたとして、禮子が家に居る事が出來ん、たゝへ一日たりとも、子として育てられたる以上は、此俺にお前を叱らするのが本意でないから、それよりは身を引こうと思ふからと、斯うでも云ふなりや隨分俺もお前に話して、勘當さしてやらせんわけでもないけれど、のう、何にせ……。』

『最も、私だつて禮子につらく當つた事は有るわけではありませんから……もし有つたとしたならばそれも仕方が有りませんけれども。』

と、直彌はやゝ氣色ばんだ。

老婆の咲子はその体を見て、

『だからさ、これは假りの話ぢやないかね、妾等が何でそんな事を思ふもんかね、

お前達が禮子を可愛がつてお呉れなのは妾も充分知つて居るもの何んで……だから禮子がそんな事を云ひ出すやうになつたのは、定めし陰で誰やら糸を引いて繰つて居るんぢやないかと云ふのだよ』と、慰めるやうに云ふ。

孝祐は長く煙艸の煙を吹き、

『ハヽヽお前はそんな事を氣にかけるか……婆さんの云ふ通りお前に兎や角う云ふのではないよ……それでだね、俺も婆さんも種々禮子にその理由を……さう決心するに至つた理由を質ねたけれども、何うしても云はんでのう。』

『だつて直彌、何ぢや無いか、妾も祖父さんも、その原因を云へと云つて責めたら、只泣く計りで跡は何も云はんぢやないか。』

『あの禮子が泣いてゞすか。』

『あゝ、それからといふものは、何を問ふても、何を尋ねても、泣いじやくり計しゝで、ウンとも、スンとも云はないんだもの……ねえ貴方。』

『ウム』と、孝祐も默頭いて、『まあさう云つたやうなわけなんでのう、ぢやから、これは何でも吃度松枝の奴が入智慧したに相違ないと思つたから……さう云つて、欺すやうにして、聞いて見たが、唯頭を振る計り、泣いて何にも云はんのぢや。』

『ぢや阿父さんは、禮子がそんな事を云ひ出すやうになつたのは松枝が蔭で禮子の糸を繰つて居るとさう仰しやるんですね。』

『さうよ、誰だつてさう思ふぢやないか』と老婆は一口茶を啜つて、『お前は何と思ふの、これは松枝の仕業ではない、眞實禮子の心から出た事と、お思ひなのかえ、まさかさうでも有るまい？。』と直彌を見た。

二十四　流石は女

『それは阿母さん、勿論私だつて』と、直彌はキッパリ云ひ放つた。

『さうぢやらう』と、滿足氣に孝祐は默頭いて『お前もさう思へば、俺も、婆さんもさう思ふ、して見るとまあ、當らずと云へ共遠からずぢやのう。』

『さうですとも、何でも松枝の業には相違ないんですよ』と、咲子も相槌を打つ。

『其處でぢや』と孝祐は言を改めて『直彌、お前は、此の始末を何うつける覺悟ぢや、それを俺が聞き度い』と煙管を右手から左手に持ち更へる。

『此の始末と仰しやると？。』

『つまり、この一件を、何う解決するかと云ふのだ、お前はまさか、放任して置くわけぢやあるまい。』

『さあ』と、直彌は、前額に波打つ毛髮を一寸撫で上げて『阿父さんは如何いふ思召でいらつしやるか』と口籠る。

『俺か、俺だつて、婆さんだつてお前次第ぢや、お前の決心次第で……素より松枝は千原家を出た時に俺等の子ぢやないのだから、のう婆さん。』

『そりや貴方が妾に仰しやる……ぢや有りませんよ……世間の母親は娘に甘いとか

云ふ話であるけれども妾は嘗へ娘で有らうが、孫で有らうが、惡いのは惡い、善いのは善い……、曲つた事は大の嫌ゐですから……。』

『さあ、直彌、婆さんも斯う云ふて居るのぢやが、お前の決心をかくさず話して見い……まさかお前だつて、血統に引かされて、緣を切つた妹をかばう樣な事はしまいがのう。』

『そりや阿父さん、御心配には及びません』と俄に袂を探つて紙卷を取出し、『するとまあ、その何ですね、禮子に兎や角う云ふよりは、さし當り禮子を教唆した本人、即ち松枝い處分ですな……松枝を何うするかと斯う仰しやるのでしやう。』

『ウム、さうだ、お前の云ふ通り松枝の處分ぢや……不埒な奴ぢやないか、千原家を彼樣にして立ち退いた計しもなんだに……折角禮子をあゝして、お前の子にして育て置くのをそいのかして……お前は何ういふ決心か。』

『私です、私とても阿父樣と至極同感です、實を云へや私の妹、素より憎い筈は

有りませんけれど、今阿母さんの仰しやる通り、善い者は何處までも善く、惡い奴は何處までも惡いのです、ですから私は充分……。』

『すると、お前は何うするとお言ひだね、あの松枝を……。』

口には強くは云へど、流石は女、母の咲子は少しは胸を痛めるのである。

『何うすると仰しやられると、さし當りその返辭には困る次第ですが……一躰阿母さんも、阿父さんも如何なさるつもりですか、先づそれから承はらうぢや有りませんか。』

『俺等かへ』と孝祐は聞き返して、『そりや俺等だつて、別にこれぞと云ふ宜い分別が有るではないよ、だから先刻から、お前の決心を聞いてるぢやないか。』

『然し、さうは仰しやるもの……そんなら阿母さんは？。』

『妾だつてさうだよ、一切お前に任せるから萬事お前の宜いやうに……お前の宜いと思つておやりの事なら、妾は何にも云はないよ。』

『何うもそれは困りましたね……私に一切任せる……何も云はない……然し阿父さん、斯うしたらとか、あゝしたらとか、云ふ事が有らうぢや御座いませんか。』

『ハヽヽ諄いね、無いと云つたら無いさ、唯俺等の役といふものは、斯う〳〵いふ事が有つたと云ふ事をお前に知らせるのが、隱居の役目ぢや……それでも駒澤家一家の浮沈に關する大事件なら兎も角、こんな些少な事を……お前は何うしやうと……俺等は善惡にかゝわらずお前のした事に贊成する、だからお前は思ふ存分……此後斯ういふ事が無いやうに、處分して呉れ、肉身の妹だと思へば、可愛いとか、いとしいとか思ふんだけれども、今ぢやお前の爲にも、俺等の爲にも何でもない、云はゞ他人の松枝ぢやないか』と云つて、孝祐は消えて仕舞つた吹殼をプッと火鉢の中に吹いた。

二十五　檢視の役

少し斜めになりかけた膝を、キチンと据りなほして、母の咲子も莫を吸ひ乍ら、

『だからさ、阿父さんも斯う仰しやるし、妾だつて異存はないから、お前は何うなりと、やつてお呉れよ、阿母さんが何う思ふだらうとか、阿父さんが何う思ふだらうからと、そんな事を遠慮して居つては、いよ〳〵松枝は增長して此後もあんな仇をするかも知れんから……だからね思ふ存分……』と云つたが、ゴホ〳〵と煙艸に咽せる拍子に、その老眼に宿る露の玉をそつと拭いた。

直彌も紙卷に火を點じて、スハ〳〵と早口に吸つて。

『ぢや、お二方とも、私が松枝に對して何うしやうと、一切貴方方は、反對なさらないと斯う仰しやるんですね』と、二人の顏を五分々々に眺めた。

『ハヽヽ念を推すには及ばん事ぢや』と父の孝祐は笑つて、『然しの爲、首を切つて持つて來る丈けは止したら宜からう、そんな事をするとお前も首を斬られんけりやならんからのう。』

と、肩をゆすぶつて、又笑ふ。

『ハヽヽヽ、御戯談を……』と直彌も同じく笑つて、

『それぢや、隨分私が思ふ通り、いじめてやりましやう、然し阿父さん、こゝに一つ改めて貴方にお願ひが有るんですが。』

『俺に？、矢張その事についてか？。』

『はい、さうです、それと云つて別段六ケしい事じやありませんが……只その私が處分する際に御立合ひを願ひ度いのです。』

『ハヽヽヽまあ差當り檢視の役かね。』

『さうです、何うでしやう、場合に依つては貴方にお口添へを願はなければならぬ事も有るかと思ひますが……。』

『宜し〳〵、承知だ、すると何かね、お前は松枝をこゝに呼び寄せやうとするのかね。』

『まあ、さう云つた樣なわけです、で私が松枝に對して斯うなら斯うと式つにとしても、彼奴はなか〳〵幼い時分から僻みの強い方でしたから、もしも私が故意に……それ以外の事を根に持つて云ふと思はれては心外ですから、……獨り阿父樣のみならず阿母樣にも立合つて頂いて……御二方の聞いていらつしやる處で俯仰天地に恥ぢざる判決をする氣です、何うでしやう、阿母さんは御承知下さるんでしやうか。』

『ハヽヽヽ、それも面白からう、お前は法律屋だけ有つて、仲々拔け目がない、宜いわ、立合つてやらうのう、お婆さん、ハヽヽヽ大分事は面白さうになつて來たのう。』

『ホヽヽヽ、すると妾も判事とかになるわけなんですね……女の判事、ホヽヽヽ。』

『ハヽヽヽ、豪いッー、婆さん何時の間にか、そんな事を覺えて仕舞つたね、ハヽヽヽ、豪いよ、俺はかなわん……すると、まあ直彌は裁判長かね。』

『ハ、、、、さう云つたやうなもんですね……時にお二方は、それを私に任して下さるに御異存はないんですか。』

『又駄目を推すね、ハ、、、、法律屋はそれが長處かも知れんが……俺も男兒ぢや、武士ぢや、婆さんはこれでも武士の妻じや、一旦お前に任せると云つた以上は……のう婆さん。』

『はー』と、咲子はそれには氣の無い返事をして、直彌に向ひ『さうして、あのお前は松枝を如何しやうと云ふの、お前はこの事件を何う裁判するの』と、わざと何氣ない体で聞くと、早くも孝祐老人はその意を察した。

『ハ、、、、婆さん、そんな事は聞くもんじやないぞ、何れ裁判の日になれば解るのだ、ハ、、、、いさゝか心配節かね』とからかふやうに云ふ。

『いーえそんな事は……。』

『そんなら、それを聞く迄も無いじやないか、ハ、、、、直彌、お前は法廷で罪人に

『判決を下す氣になつてやゝて呉れ、裁判官には親兄弟は無いからのう。』

『はい、それは無論の事です。』

屹度形を改めて、二人の面を眺めた直彌の眼には、動かすべからざる、決心の色はひらめいた。

二十六　悲慘の境遇

義父直彌の跡について、先き程から生垣にヒタと身を寄せ、一部始終殘らず聞いて居た禮子は、祖父の孝祐が辭として、今しも『裁判官には親兄弟は無い』と云つたのに、義父は『無論の事です』と、答へるのを耳にするや否や、初めから縮かして居た胸は一杯になつて、思はず、ワツと前後を忘れて泣き出さうとしたが、フトコで泣いてはと、氣を取りなほし、ジーツと悲しさをこらえて、何何事をか語るかと耳をすました。

祖父の聲は例の高調子であるから聞くに骨が折れんけれども……祖父の云ふのは只『ソム』『成程』『尤だ』『それでは少し手ぬるからう』位ゐの處であつて、要用の義父は何を云ふのか少しも聞こえない。

『そりやね、少しは手酷くやらなければ』と云ふのについいて、『さうです、あんな人非人はさうでもしないと……』と僅それ迄聞こえたが跡は直きに低くなる、戸にヒタと耳を寄せんとすれば、膝頭がわな〳〵と振ふて、氣取られさうなり、今は如何ともしがたく、禮子は生垣の傍につゝ伏して、忍び泣きするのであつた。

お祖父さんも、お祖母さんも、阿母さんの爲には、實の阿父さんに阿母さん、又義父さんにしろ、阿母さんは現在の妹、必ず惡しくは取り計らうまいと思ふて居た禮子の目算はがらりと外づれた。

今聞けば、『手酷だの』、『容赦せずだの』、『人非人だの』と云ふ、あらゆる松枝の爲には不利益な言が發聞する、こんな事なら、初手から、無理をして呉れと云ふのでは

無かつたと、禮子はつく〳〵自己が輕操なりし事を悔ると同時にあまりに祖父母や義父の心つよきを恨むのである。

然し考へて見れば無理もない事、何處の國に自ら進んで、父母に勘當をうけん事を願ふものが有らうぞ……母松枝が悲慘なる境遇に同情して、それと難苦を共にしやうと思つて、前後を考へず、勘當して呉れと願つたのは確かに早計で有つた、それが爲に母松枝にも、飛んだ嫌疑はかゝる……只嫌疑はかゝるのみなら宜いが、その嫌疑に依つて、惡くすると、母は益々……今より尙一層悲慘の境遇に陷ち入らないとも限らない……否陷入るらしい、今の話の模樣に、禮子は益々悲しさは加つて來るのである。

祖父母も、義父も、自分が勘當を願つたのは母の入智慧に依るかのやうに考へて居るらしい、然しこれは母の入智慧でも何でもなく、自分が、斯く感じ、斯く思ふたから、願ふた迄の事、それを深くも考へても呉れずに、母を窮命するとは、あまり

に酷な仕業と、一時は三人を恨んだが、さて思ひかへして見れば、先程祖母の云つたのも無理はない事、十八歳や十九歳の自分が……云ば世の中の何たるを知らない自分が、兩親の勘當を願ふ、それを母の入智慧だと疑ふのも尤だ、道理だ、無理は無い、一度有る事は必ず二度有るもので有るとは……母はたとへ心になき事にせよ一度は道德上より見れば輕からぬ罪を犯して居る、夫の亡き後、人も有らうにその弟子たる古川と姦すると云ふのでさへ充分罪があるのに、その上五歳や六歳になる未だ乳を要する幼兒を、その姑に任せて家出をしたといふ、重罪を犯して居る、一度有る事は二度ある……自分が願つた勘當を、母が敎唆した如くに云ふ、それも無理はない、無理はないけれども、それではあんまりだ、酷と云ふものだ、一層の事、此處を飛び出して、母の寃罪を云ひ解かんか……と、幾度となく禮子は身を起しかけたが、いや〳〵自分はたとへ如何云ふた處で、一度かゝつた濡衣は容易に……自分如き者の言ひ開きで辯せるものではないと、斷念して……斷念しない迄も、飛び

込んで云ふ丈けの勇氣は出來なかつた。

二十七　洋燈の光り

然しさうかと云つて見す〳〵母の不爲になるのを聞いて居り乍ら止める事も出來ず……え、何うしやう、何うしたら宜からうと、身をもがけば、もがく程宜い智慧も浮ばない。

『あゝ、自分は何うしてあんな事をお祖父さんにお願ひしたつたらう、阿母さんがあれ程……阿母さんと呼んでもいけないと仰しやつていらつしやる位ゐなのに……何故あゝいふ事を云つたつたらう、自分の言つた事から出た科ならば、自分に來るべきは相當なのに、何故、義父さんも、お祖父さんもそこに氣が付かないのだらう、阿祖母さんはそこにお考へが至らないのかしら、あんまりだ、いくら阿母さんに罪が有るたつて、酒の糟を食つた犬は追はないで、香を嗅いだ犬を追ふやうなされか

た、あんまりだ、無理だ、無慈悲だ、一層の事阿母さんに告げて……。』

『然し阿母さんにそれを知らせた處で、それを聞いて逃げかくれするやうな阿母さんなら宜いけれども……阿母さんは彼の通りの氣性、古川の罪をさえ自分が着て獨で泣いて暮らしていらつしやる位ゐの方だもの、よし、妾がこんな事を云つた處で……もしもこんな事でも云つたら最後、此方から呼ばない先きに、阿母さん御自分が出かけて來て、妾の罪を御自分が着て、いかにもそれは妾が禮子に申しつけましたと仰しやるに相違ないし、して見るとこれも何うやら……如何したら宜からう、何としたもんだらう、此儘妾が默つて知らない、聞かない振をして居れば濟むけれども、さうはとても人情として……人の子の情としてはとても出來ない、出來ぬからと云つて……いつそ此話を聞かねば宜かつた、何故義父の跡を追かけて來たんだらう、何故人のいやしむ處の立ち聞き迄して、こんなつらい話を聞いたらう、斯んな話ならば聞くのではなかつたのに、よしんば聞かせられて

も、耳を掩ふて聞くんぢやないのに、何故妾は……。』

頭は亂れ、胸は裂けるやう、心臟の鼓動は益々繁しくなる、眼はくらめく、足はへる、止度もなく涙は迸る……禮子は、斯く思ひ來り、斯く思ひ去り乍ら、生垣の根方に突伏して、女が第二の生命として居る折角の春衣の土に汚れるのも忘れて居る。

『ハ、、、兎も角、お正月は止したが宜からう、七日卿迄はのう、』

『はい、ハ、、、仰せらるゝ迄もなく、折角の……一年に一度しきや無いお目出度いお正月に、四角張つて、怒鳴りたくもありませんからね。』

『さうだとも、然し直彌、松枝は來るだらうかね。』

『ハ、、、それは阿父樣の口吻を眞似るではありませんけれども其時にならなけりやわかりませんよ、ハ、、、お癡みなさい。』

相談は漸く終つたと見えて、直彌は歸るらしき容子にパッと氣がついて、禮子が飛

(退かんとした時、此時晩し、彼の時早し、祖母の咲子が持つて直彌を送り出す洋燈の光りにおぞくも見つけ出された。

『直彌、垣根に人が倒れて居るやうぢやのう。』

いち早く見つけたのは孝祐老人、

云はれて氣がつき直彌もその方に眼を配れば、夜眼にもしるき、禮子の姿、

『おゝ、お前は……禮子ぢやないか。』

『はい、義父様何うぞ御免なすつて……。』

『一体お前は何うしたのか、何故斯んなに晩くそんな處に寢て居るのか、え』と、直彌が再び云ふ時、祖母の咲子は、上草履の儘飛んで出て、その傍に倚つて、

『これ禮子、お前はまあ……斯んな處に寢て……如何したんだね、何處惡いのかね』

と抱き起した。

『はゝ、はい、唯あの……何卒御免なすつて、妾が惡いのですから……』と禮子は泣く計り。

『ハヽヽヽ御苦勞な事ぢや、禮子は松枝の爲に斥候をやつたと見えるハヽヽヽ宜い わ、直彌連れて歸れ、夜露に打たれるとなんだから……。』

云ふより早く孝祐老人は身を返して家に入つた。

跡に殘つた祖母の咲子と、義父の直彌とは、泣き入る禮子を中にとりまき乍ら、互に眼を見合はして暫し何にも云はなかつた。

二十八　攻撃の鋒先

『も、もう、叔母さん、この通りしつかり醉拂つて仕舞ひました、此上頂戴致しては……』と、武下は猛々の火炎り見たやうに眞赤になつて、武子が、下女のお竹に酒の燗を命ずるのを止めるのである。

『ハヽヽ武下君、そんな事は云ふもんぢや無いさ、今日は正月の三日ぢや無い

か、そりや一月三日なる日は我々が將來に於て尙幾千送迎せにやならんかも知れんが、然し武下君、明治四十一年の一月三日なる日は再び來んぞ、平常には飲まない僕でさへも此の如し、況や常に斗酒敢て恐れざる君に於ておやだ、ねお祖母さん、未だお酒は有るでしやう。』

常には、、、いけぬ口乍ら、今日は武下を相手に三四本倒した芳樹は、熟柿の香をプン〳〵させ乍ら祖母の武子に斯う云つた。

『ホ、、、何だね、有りますかとは、今日はお正月ぢやないかね』と、武子は笑つて、敷居越に手を突いて指圖を待つて居るお竹に目配せすると、お竹はその儘ツイと座を外づす。

『こりや恐れ入つた、然し叔母さん……いや千原君も怪しからん事を云ふ、斗酒敢て辭せんなんて、そりや酷だぜ、僕を誣ゆるも亦甚しい哉だ。』

『ハ、、、そんな体裁の宜い事を云ふな、そりや尤も、僕やお祖母さんの前で飲む

酒は、窮窕ある阿嬌を座に侍らして飲む酒とは味が違ふさ、お旨しくも無い筈さ、然しだ、武下君、君此處は僕の家だぜ、ハ、、、そんな事を望んだつてそりや木に倚りて魚を望むが如しと云ふもんだ、まあ〳〵不味くとも今日は充分飲んで呉れんといかんよ。』

『こりや怪しからん、君はいよ〳〵出で、いよ〳〵酷な事を云ふ實際此上は飲めんから……。』

『そんな事は云ふべからずさ、先達の忘年會の事を忘れたか、五合も入らうと思ふ盃洗でつゝけ樣に三杯仰つた事を知つてるぞ、ハ、、、何だ、それに德利を見い、未だ三本しきや並んで居らんでないか。』

『ホイ、今度は攻撃の鋒先を變へたな、然しあの時はあの時さ。……今日だつて隨分あの時には劣らん位ゐ……德利を以て酒の量を計るべからず、だつてお竹君は、どん〳〵下げて仕舞ふぢやないか。』

『ハヽヽ馬鹿な事を云ふな、兎に角後進の僕さへもこれ位ゐ飲むのに、先輩の君が……そりやいかん、オーイお竹早くお銚子のお代りだ。』

始終ニコ〳〵して二人の顔を見較べて居た武子も此時。

『何ですね、資朗さんも、そんな弱い事を云つて、芳樹さへも斯う飲んでるぢや有りませんか……妾のやうなお祖母さんが居てお酒が不味いと言ふなら、二階にでも行くから何卒……』と自ら酌をしてやる。

『こりや叔母さん迄僕を攻撃するですな、ハヽヽさう意地悪く出なさると……宜しい、ぢや私は醉倒れる迄頂きます、その變り又此間のやうにお厄介になるかも知れませんから、それでも宜御座んすか。』

『あゝ結構でよ、ホヽヽ眞實に此間は苦しさうだつたね。』

『いや、苦しいの苦しくないのなんて……ねえ芳樹君、君が今言つた通り盃洗でやつたおかげで……無論醉ふたからと言つて平常には前後を忘却するやうな男ぢやないんですけれども、あの時計りは、ハヽヽあまり苦しかつたもんですから。』

『ホヽ道理で、あのお前さん達二人を二階に上げるには餘程骨が折れたよ、醉つてる癖に女の手を借りて梯子を登るやうな生久地無しでないなんて……。』

『ハヽヽそんな事を言ひましたかな。』

『言つたとも、それに芳樹も、だから……ホヽヽお竹なんどはいくつ芳樹の拳個を食つたかホヽヽ。』

『そりや何うも何んでしたな、一寸も僕は』と云つて頭を掻き、『千原君、君は此間の晩の事を知つてるかへ』と振り返る。

二十九　恥しいか

暫くの間話しかける機會なき儘、頭りに肴を荒らして居た芳樹は、此時儘はてゝ口にして居た數の子を鵜呑みにし乍ら、

『そりや君のやうな無神經な動物と違つて、フム憚ん乍ら、千原芳樹樣だ、酒位ゐに性根を奪はれるやうな事はないよ、ハヽヽ君が梯子を滑つて轉げ落ちた事などは愉快に拜見したよ。』

『こりや酷い、愉快に拜見したとは酷いね、ちや僕は梯子をころげ落ちたんだね。』

『勿論ー』と、芳樹はすましたもの。

『ホヽヽ』と覺えず、祖母の武子は吹き出して、

『ホヽヽ道理で……よく覺えてると見えてお祖母さん、僕は昨夜何んな事をしました、竹や僕はそんな事をしたかね、なんて聞かなかつたからね。』

『シッ〳〵。』

『そーれ見ろ、そんな目配せなんかしたつて駄目だ、ハヽヽさうだらうと思つた、如何に芳樹君だつてハヽヽ。』

『いや、それは嘘だよ、お祖母さんは君の面目を潰すと思つて、わざとあんな事を

云ふんだ。』

『フムさうだらうよ、ね叔母さん、確かさうでしやうね、ハヽヽ。』

『ホヽヽさうかも知れないよ、ホヽヽ自分が妾に預けて置いた紙入れを、次の日になつてお祖母さん、途中で財布を落して來たなんて大騒ぎをやつた位ゐだもの……。』

『こりやいかん、お祖母さん、そゝそんな事は……それでなくてさえ武下は僕を馬鹿にしてかゝつてるから……。』

『ハヽヽ千原君、宜い加減に往生しろよ、何と云つても叔母さんの同情は僕に有つて君にないんだからね、ハヽヽね叔母さん。』

『ホヽヽ。』

三人共に打興して居る時、お竹は三本一時に燗をつけて持つて來る。

『ヨウ、新年お目出度う、お竹坊今日は大層奇麗になつたね』と、武下はニヽヽと

兩手をお竹の前に突き出す。

『あら』、と酌せんとしたお竹は眞赤になる。

『ハヽヽヽお竹恥しいか、お前の好きな武下君だ、折角醉はして介抱してやれ、やがては武下夫人竹子の方となる事が出來るぞハヽヽヽ。』

二人があまりからかうので、お竹は十七歳の恥し盛り、銚子を置き放しにして逃げんとすると、『ドッコイ』と、武下はそれを引きとめて、

『ハヽヽヽお竹坊、怒つたか、怒るもんぢやないぞ別嬪と云ふものは、ハヽヽヽ。』

『ヨウ〳〵武下……阿母さん、何うです、しつかり似合つた夫婦ですね。』

『ホヽヽヽ。』

『さうだらう似合つて居るとも、ハヽヽヽそねめ〳〵お竹は何うしても武下夫人ぢやね、お竹坊。』

と、戯むる時、格子先きに人の訪ふ聲、得たりと、座を外つしてお竹は勝手に逃げる、跡で三人は大笑ひ。

『ハヽヽヽそつくり似合つてるよ、ねお祖母さん、これぢやいよ〳〵お竹を武下君の處に嫁にやらんけりやなりませんね。』

『ホヽヽヽ。』

『眞實ですよ、お竹だつて武下君には何んだし、武下君だつて萬更……ね武下君。』

『ハヽヽヽ有難う、是非お願ひ致し度いねハヽヽヽ叔母さん、あゝいふ女を妻に持ちや、第一嫉ける心配がなくつて宜いですな。』

『何故？。』

『何故つて、それは云はぬが花さ、文學者の芳樹君にも似合はないぢやないか、ね叔母さん、お互に云はぬが花よ世間の人につて事も有りますからねハヽヽヽ。』

『ホヽヽヽ資朗さんは眞實に面白いよ、ホヽヽヽ面白い事を知つてるね。』

『そりや阿祖母さん、知つてる筈ですよ、新柳二橋は申すに及ばず、板橋千住の塲

末迄出馬せらるゝ方ですもの。』

『こりや怪しからん、芳樹君は又僕を』と武下は何何事かを云はんとする時、お竹は急に入つて來て祖母の武子の耳に何かひそ〳〵とさゝやくのであつた。

三十　追分ぶし

お竹が何事か祖母の武子にさゝやいて其儘其處を去ると、武子も同じく立ちかけて『資朗さん、あの妾は一寸中座致しますから』と云つて芳樹の方に向き、『ね芳樹お前は資朗さんのお相ひをしてね。』

『はい、それは宜う御座んすが、お客樣と云ふのは一体誰れです。』

『それは云はない方が宜からう何んなら今迄れて來るけれども……。』

祖母の言に早くも芳樹は合點して、

『さうですか、僕には用は有りませんからね、お祖母さんはゆつくりお話していらつしやい、貴そのお酒は』と、わざと、勝手の方に聞こえよがしに云ふ。

『そんなら妾は失禮しますよ』と武子は二人に會釋して出て行つた。

何やら容子のわからぬ武下は、ウヽ〳〵して居たが、武子が去ると同時に。

『千原君、お客樣だと云ふのに……僕は居つては差支あるぢやないか?』と芳樹に問ふた。

『ハヽヽ、そんな事が有るもんか、お客もお客に依りけりだ、僕には用の無いお客樣だ、さあ飲むべしだと、先刻ビールを呑んだコップをとつて、芳樹は武下につきつけた。』

『そりやいかん、こゝこんなものでは……。』

『いけない事はあるものか、大きい盃は酒が旨いよ、さあ〳〵せずと、呑むさ』と、今迄の樣子とはガラリと違つて、芳樹は、共にコップであほる。

『武下、飲めよ、飲んで面して唄ふべしだ、人生僅五十年、七十年は古來稀なり、

さあ、人間萬事酒の世の中だ、さあ、いつもの十八番の米山でも聞かして貰らい度いね、僕か、僕は無論謠ふさ、僕は君のやうに粋なものは知らない、詩をやる、吟詩をやる』と、又もやグッと、コップに半分程有る酒を飲み干して、聲高々と吟ずるのである。

武下は口をアングリ唯呆れて居る。

『閨中の小婦は愁を知らず。春日粧を凝らして翠樓に登る。忽ち見る柏頭楊柳の色。悔らくは夫婿をして封侯を求めしめしを。』

『何うだ武下君、これ位ゐなもんだ、旨いとか何とか云つてくれても宜からうぢやないか。』

『旨いッー。』

『そんなら君の米山だ、米山から追分、さあグッ〳〵せずに唄ふさ。』

『グッ〳〵せずにとは恐れ入るね。』

『恐れ入ったら猶更唄へ、君が唄はんとなれば、僕は力にかけても唄はす！。』

『ハ、ヽ、ヽ、お武家様、何うぞ御勘辨を、何分町人の事で御座いますから、無禮の段は……。』

『そんな事は何うでも宜い、さあ唄つて呉れ玉へ、聞かうぢやないか。』

唯ならぬ眼つき、息ざし、強いて否まば、又いかなる事や仕出かすかも知れずと思ふのが一つと、自己が美音をほこるのが一つと、此二つで、まゝよと、武下はその細く高い女の聲も及ばぬやうな美音をはりあげて唄ひ出した。

唄『黄楊のう、横櫛しや、伊達にはさゝぬ、切りし前髪のサヽ留めにさす。』

初めは米山、次は追分ぶし。

唄『忍路高島、及びもないが、せいめて、歌室磯谷迄……。』

梁の塵も舞ひやせんと、思はる計りの美音、勝手の話聲はハタと止んだ。

ゲッタリと首をうなだれて聞き惚れて居た芳樹は歌は止むと共に顔を上げた。

『實に君はうまい、君の聲は天品だ、武下君頼む、何卒もう一つとは云はん二つ計り、ね、頼む』と、武下のコップに酒を注いだ。

『戯談ぢやない、ひゝ、冷かしては』と、グッとそれを一口飲んで、『宜し、ぢやもう二つ計り唄はう、開いて呉れるか。』

『有難い聞く段ぢやない、謹んで拝聽する。』

『そんならやらう、兎も角も、もう一杯』と、五勺計りの酒を一時に仰つて武下は又唄ふのである。

『鳥も通はぬ、八丈ケ島へ、やらるゝ此身はいとはねど、跡に殘りし妻や子は、何うして其日を、送くるやら……。』

三十一　百鬼夜行

猶も續いて武下が唄はんとして居る時、祖母の武子は、いそ〳〵と入つて來た。

『ホ、、、、大層賑かですね』と武下に愛嬌を振りまいて、『あの芳樹、何うしやうの、禮子さんがお前に逢ひ度いと云ふが……』と、その顏色を伺つた。

『僕にですか？。』

芳樹の顏色はサッと變つた。

『あゝ』と　武子は默頭いて、あの鳥渡でも構はないから、是非願つて呉ろつてね。』

『フム』と云つた切り、芳樹は急には答へない。

武子は猶語を繼いで、

『先頃から度々來るけれ共、お前は何時も留守で……何も禮子さんに惡い事が有るでなし……逢つては如何かね、逢つてやつて呉れまいか？』

『さあ』と芳樹は首をひねつて、『お祖母さん、全体禮子さんとやらが僕に、な、何等の用が有るのですかね。』

『ホ、、、、又六ケ敷い事を云ひ出したね、何の用か知らないけれ共、逢ひ度いと

言ふたら逢つてやつたら宜いではないか。』

『それはさうですが……けれ共、用も無い者に、折角の清遊を妨げられるのは厭ですからね、お祖母さん、何んなら、その禮子さんとやらに、僕が病氣で寢て居るからと言つて謝絶して下さいませんか。』

『何を言ふのだね、ホヽヽ病氣で寢て居る人が、あんな大きな聲を出して吟詩なんかやつて……病氣だと言つたら吃度……猶更逢ひ度いと言ふに違いはないよ。』

『ハテ、それは困つたな』と頭を抱えて、先程から、話し出す機會も無く、獨りでヲレて、頻りにガブ〲酒を仰つて居る武下を見返つた。

『武下君、何うしたもんだらうね。』

『何が？。』

武下はわざと呆けた風をする。

『何かぢやない、今の話しさ、君ならば何うするね。』

『ハヽヽヽ君ならと云つて、僕はそのやうな境遇に立ち至つた事が無いから知らんよ……然し千原君、君のやうな百鬼夜行的容貌でも拜したいと云ふ物好きな女が有つたら、快よく拜ましてやるが宜いぢやないか。』

『こりや酷い、先刻の敵打かね……然しこれは戯談ぢやない全だよ、ねえ君、親友の實は斯かる時現はすもんぢや無からうか。』

『ハツ、ハツ、ハツ、飛んだ處で親友問題を擔ぎ出したね……然し戯談は戯談として何ういふ事情か知らんけれども、會つてやる方が宜いじやないか、清遊を妨げられるのは僕も本意じやないさ、けれども唯君の御面相を拜む丈けなら一時間ともかゝるわけじや無いんだからね……』と、武子の方を振向き『神様を拜むだつて、十分か長くて三十分位ゐなもんですからね……』と又笑ふ。

『ホヽヽ、さうですなも』と武子は答へて、『だからね、芳樹、鳥渡會つておやりよ、何も込み入つた話が有るでなし、ほんの一寸なんだから……』資朗さんだつ

て、差支あるわけではあるまい？。』

『ハヽヽ、僕ですか、僕は却つて望む處です、何うでしやう、一つその方にお酌を願つて下さいますまいかハヽヽ。』

『そりやホヽヽ、資朗さんは眞實に……』と云つたがやがて眉をひそめて、『芳樹、もう宜加減にして承知して呉ないかね、老人を何時迄立たして置くんだね』と、返辭を催促する。

無言で、二人の會話に耳を傾け乍ら、何か考へて居た芳樹は此時突然と口を開いた。

『お祖母さん、承知しました、禮子でも、不禮子でも構はん連れて來て下さい、その代り武下君の云つた如く酌はさせてやらにやー』と、傍の德利を取上げて、盃にも注がずその儘仰るのである。

『ぢや連れて來ても宜いかえ。』

『宜いですとも……序にお酒も……。』

武子は首肯いて座を去つた。

三十二　馬鹿丁寧

祖母の武子が後姿を見送つて居た武子は忽ち眼を轉じて、

『千原君、禮子さんちうのは何だえ』と芳樹を見た。

『何でも無いよ、矢張我々と同じ……いや我々より數等下劣な、汚れた血を盛つた皮袋なんだ』と、芳樹は苦り切つて云ふ。

『然しなんぢや無いか、何うもこれには深いわけが有りさうな……先頃の樣子と云へ、又今日と云へ……何だね。』

『いやそれはこゝで明言はせん、跡で言はう、只禮子なる動物と、我輩との此處に於ての對話に依つて大方は推察するさ……何れ委しい事は跡で……。』

『さうか、ぢや跡で聞く事にしやう』と、武下もその儘默り込む。

無言で酌し合つて、無言で飲み合ふ、唖の會合でも有るかのやうに二人は白眼合つて居る時、スタ〳〵と、墨にさはる裝の音がして、合ひの唐紙は開かれた。

先きに立つたのは武子で、その後ろについて、オヅ〳〵入つて來たのは小豆色縮緬の羽織に、風通の二枚重ねの禮子。

祖母の武子は禮子を芳樹の前に座らして。

『芳樹さん、これは禮子さんだよ』と引き合はせて、今度は禮子に『これは芳樹で、此方は武下さんと云ふ芳樹のお友人ですよ』と云ふと、禮子は眞赤になつて、

『始めてお目にかゝります……』と云ふのも口の中、儉約して二人に一つの御辭儀。

武子は默言って頭を下げた。

『ハヽヽさうですか、我輩は如何にも千原芳樹、お芳名は兼て承はつて居りましたが……さて今日の御用は？』と芳樹は馬鹿丁寧に禮を返す。

芳樹のひねくれた挨拶に、祖母の武子は烏渡その顏を白眼んで、

『何んだね お前は？』とたしなめるやうに云ふ。

『いゝえ、何んだでは有りません』と芳樹は頭を振つて、『光陰は流るゝが如し、タイム、イズ、モネー、用事は成るべく早く承はつて、それから話なら話とした方が何んですからね。』

『まア』と武子は呆れたやうに云つて、『禮子さんや、芳樹は醉つて居るのだから、氣におかけでないよ』と禮子を慰めた。

『いゝえ』と、禮子は上眼使ひして武子の方を見て『そんな事は……何う仰しやられてもお眼にかゝる事が出來ましたから……』と言ひ淀む。

『何、お目にかゝれば？、ちや禮子さんとやらは我輩のお目にかゝり度いので來たんだね。』

祖母の止める間も無く芳樹はグッと禮子を白眼んだ。

『はい、實はその……別に用と云つて……只お目にかゝつて御年始を申上げ度いと

思ひまして……。』

傍に云ふ禮子の跡について武子も、

『芳樹や、禮子さんからお年玉を戴いたんだよ、宜くお禮を』と言ふと、芳樹はしぶ〳〵と頭を下げて、

『何うもそれは……有難う。』

『あらー』と、禮子は益〻顔を赤めて、禮を返し乍ら武子の袖をソッと引く。

『あ、さう〳〵』と武子は默頭いて、『時に芳樹、禮子さんが、此後とても遊びに來ても宜いかつてお前に聞いて呉れと云ふがよからうね。』

『遊びに？』と聞き返して芳樹は、『ハヽヽヽ、嬉べ來ちやいかんと云つたつて來るでしやう、ハヽヽヽそんな事には僕は答ふる必要が有りません、酒だ〳〵』と、手を打つ、武子と禮子は互に顔を見合はした。

やがてお竹が持つて來た德利を手にして、

『何うだ武下一つやらんか』と芳樹は例のコップをさすと、武下は默つて、吸ひさしの紙卷を右手に移してなみ〳〵と注がせた。

『さあ、禮子さんとやら、先程の咄はかげで聞いて居たらう、お酌を頼む、酌をして呉れい。』

伏眼勝ちにして懐かしさうに芳樹の顔を盗視して居る禮子の前に德利を置いて、芳樹はいきなり、コップをその目の前に突きつけた、武子は思はずヒヤリ。

『……。』

默つて芳樹の云ふがまに〳〵酌をする禮子の手はぶる〳〵と振へた……塒を求むる鴉の鳴く音は此處彼處に姦しい。

三十三　今昔の感

丁度十七八年振りで松枝は我家の……駒澤家……門前に立つた。

澄み渡つて一點の雲だに無き青空には、幽かに聞ゆる紙鳶のうなり、街中にカチカチと鳴るは羽子突く音、門松も拂はれ、神繩も取られた七艸過ぎの今日も、未だ何處やらか屠蘇の名殘を止めて、道行く人も何んだか呑氣さうに見える。

花崗石の門の上から、ニューと仁王の腕のやうな節くれ立つた枝を出した笠松、門の外より見すかされる、皆それ〳〵に紅き白き蕾を持つて居る數株の寒梅、今にも芽を吹き出すさうな柳、さては枯葉の一片、二片枝に殘つて居る梧桐、それもこれも皆松枝には目馴染の有るもの計り。

家の後方に高く樹立して居るのは、秋になると、枝もたわゝに實る……切ると血の迸ると云ふ傳說のある……公孫樹、針のやうな葉のある二抱計りも有る樅の木の下には慥か池が有る筈、池は何うなつて居るだらう、築山は何うなつて居るだらう、あゝ、あの公孫樹の幹の蟬を捕ると云つて、阿母さんに叱られた事も有つたに、あゝあの樅の木の根方に有る朽繩を蛇だと思ひあやまつて、池にはまつた事も有つた

に……。」

十八年前には猛犬との評判高かつた……何時も自分が歸つて來ると、鼻を鳴らして飛びつく、赤毛のチッド、あゝ彼犬は何うしたらう、門の……玄關の前の敷石に何時も畫寢して居るので有つたが……、しかしそれは十八年前の事、さう〳〵死んだらう、死んで仕舞つたらう、彼時にはそれは〳〵奇麗な三毛の玉（猫の名）も居つたし、よく馬鹿々々、と口癖のやうに云ふ、キング（鸚鵡の名）も居つた、而して阿父さんも未だ白髮も無かつたし、阿母さんも……まださうか知らん、まさかさうでは有るまい、十年を一ト昔と云ふからには、十八年と云へば、二タ昔に近い歲月、兄さんは、義姉さんは……、禮子の話には健康で居るとの話だけれども……さぞ顏が變つて居るだらう。

下女には慥かお松と云ふ女と、お縫といふ女と二人居つて、お松の方は丸顏の愛嬌の有る、お縫の方は海いもの有る、何れも忠義な女供で有つたが……あゝ今は居ま

い、お松はあの時は十九歳だつたから、今年は丁度三十六歳、お縫は三十五歳、何れも今時分は他處の妻君さんになつて子供の四五人も有る位ゐだ、何うして女中なんかして居るもんか、あゝさうして自分は……あゝ自分は何とした樣だ、何とした零落れやうだ、一時は當時日本第一と人にも許され、自も許した千原蕭伯の妻として、令名つとに高かつた身でないか、多くの人々の……女の……羨望の的となつた身でないか……。

『もう今からは、この駒澤家の人ではないぞ、お前は今夜から千原家の人だ、駒澤家が有ると思へば、氣儘も起るから、父も母も自家もないと思つて』とは、千原家に嫁く時……この門をまさにくゞらんとする時の父の教訓。

『六郎さんはお前には過ぎた夫だ、腕は日本一といふ評判だし、學問は西洋に四五年も居つたと云ふからしつかりして居やうし、それに、小姑はなく向ふの阿父さんや、阿母さんと云ふのは氣のよささうな、親切氣のあるらしい方、それにつけ

ても家に居つた時のやうな我儘は出さないやうに、かんでふくめるやうに云つて下すつたのは阿母さん。

あゝその時阿母さんが見送つて下すつた處は彼處、阿父さんは、彼處の敷臺に立つて、いらしたのだ、人車はズラリと並ぶ、門前には人だかりする、唯もう自分は恥しくつて〳〵……その恥しい中にも嬉しいやうな氣がして……然し今は……。』

松枝は、過去を追想し、現在を思ひ、轉た今昔の感にたへかねて、その儘ポンヤリ門前に立ちすくんだ。

三十四　お前百迄

暫時の間、身動きもしないで、石像の如く突立つて居つた松枝は、やゝ有つて氣をとりなほし、居處に引かるゝ羊もものかは、しほ〳〵と門を屈つた。

梅、櫻、松と、とり〳〵に植ゑつけてある、道を辿つて、玄關先きに行つたが、さ

すがは、玄關から威張つて室内を乞ひ居る身ならねば歩を轉じて、左方の勝手口の方に廻つた。

『御免下さいまし、御免下さいまし。』

『何方？』と、二聲目に中から返辭して出て來たのは、常に禮子が話柄となる下女のお末であらう、滑稽たポンチ畫見たやうなあまり類の少ない面で直それと知られた。

松枝は極まり惡げに小腰をこゝめて。

『あの、御隱居樣……旦那樣はいらつしやいましやうか、それならばあの』と口籠る。』

お末は、あまり立派でない、松枝の風采を、ヂロ〳〵と、頭の上から足の爪先き迄見下して、

『はい、いらつしやる事は、いらつしやいますが……貴方は？』と問ひ返す。

『妾ですか、あのそんなら、下谷から參りましたと申して下さい。』

『お名前は？。』

夏蠅や、お末は未だ問ふのである。

松枝はそれには少し躊躇して居つたが、思ひ切つて、

『ぢやあの、下谷から松枝が見えたと申して下さい』と云ふ。

『は、では……少しお待ちなすつて……』と、下女は題を返して、奥に行つて、何か物云ふ風であつたが、暫くして出で來り、

『あら貴女は……妾一向知らないもんですから……さあ何うぞお上んなすつて。』と云ふ處へ、兄嫁のお律も飛んで出て、

『まあ松枝さん……さあ何卒、外はお寒う御座んすから』と手を採らん計りに云ふ。

松枝も云はるゝ儘に、小汚い駒下駄を脱ぎ捨てゝ、

『何うも、飛んだ御無沙汰を……』とその儘その跡について奥へ通る。

通されたのは應接間に宛てられて有る玄關の突當りの三疊に隣つた十疊、眞中には青銅の獅噛み火鉢が置かれて室の左方、十二疊に扨ける方には鐵舟居士の筆になつた、『お前百まで、わしや九十九迄、ともに白髪の生へる迄』の、扁額、欄間、遠棚床の間、押入れ、多少の變化こそあれ、大体は十八年前と同じこと、松枝は何となく胸が塞がつて來た。

布團を敷かせ、茶を進めて、改まつてお律は挨拶をすれば、松枝もそれに答禮する。

お律はつく〳〵、松枝の變はりはてた……やつれた樣子を眺めて、茶をすゝり乍ら、

『まあー、眞實に久し振りでしたことね、何年ぶりですかしら、何でも餘程長く逢ひませんでしたね』と先つ主人役だけに口を切つた。

『はあー、丁度十八年計しになりますよ』に僅に松枝は答へながら、持つて來た風呂敷の中から菓子折らしい物をとり出して、『ほんの印計りで……』とお律の前に置く。

『あら、斯んな事をなすつては』と、お律は一寸眉をひそめて、『妾こそは、とんと御無沙汰致して居りますのに』と、何やら、わけのわからぬ返辭をして頭を下げた。

『いゝえ、ほんのつまらんもんですよ』と松枝は禮を返して、時にあの忠雄さんは佛國とかへ……お便が有りますの？』と聞く。

『はあ、有難う御座います、忠雄も丈夫で、時々……貴女にもよろしくと申してまゐりますよ。』

『オヤ、御親切に……。』

と云ふ時に、勝手の方で電鈴がジイ〳〵と鳴る二人は共にその方に耳を傾げると、暫くして、先刻のお前が出て來て、唐紙をあけ乍ら。

『あの旦那樣が、お客樣に、此方へお出で下さいつて……。』と、二人の顏を伺つた。

『さうかえ、今行くよ』と、お律は返辭も輕く、

『さあ何卒松枝さん彼方へ』と松枝を促して立ち上がった。

三十五　善は急げ

應接間を左へ出て、十二疊の前の中庭に面して、縁を通り、突き當つた處で右に曲りズーッと行つた處は、奥の十疊。

お律ば松枝を案内して、その儘逃げるやうに自分の室と定めてある十二疊の間に歸つた。

跡にとり殘された松枝は何だか心細いやうな氣がしたけれども、えゝまゝよと、畢生の勇を皷して唐紙に手をかけた。

『おゝ、松枝か、待つて居たぞ』と、云つたのは父の孝祐、唐紙を後手にしめて、室内に入れば、父の右手には母の咲子、少し下つて兄の直彌は、南の庭にしげる梅の枝の影をうつす、障子を背にして座して居る。

『御機嫌宜しう』と、松枝はとゞろく胸を押靜めて會釋した。

三人は僅に頭を下げたなり。

『松枝かへ、宜く此處迄來る道を忘れないで御出ですね』と、母の咲子は眞先に口を出した。

『はあ、何とも……。』

『いーえ、妾はお前が暫く來なかつたので云ふのではない、千原家の事は別として今迄妾等がお前につくして居た恩も忘れて、此間のやうな事をして居乍ら……よくそれ位ゐにお前は、感心に、家に來る道節をお忘れでないと云ふのさ。』

七分のなつかしさと、三分の憎くさとをこきまぜた咲子の胸は沸かへるやう、その言は振へた。

『ハヽヽヽ、これ婆さん、止したが宜い、何事も云ふな、裁判官は決定つて有るぢやないか。』

と孝祐はそれをたしなめて、『これ松枝、俺は婆さんのやうな事は云はんが……今はお前を、直彌が何故呼んだか、それを承知で來たらうな、まさか褒賞を貰ふつもりで來たのではあるまい。』と云ふ。

『はー』と松枝は幽に答へた。

『そんなら宜いとして』と孝祐は一服吸ひ、今度は先程から何も云はず默つて松枝を白眼みつけて居る直彌に、『さ、善は急げぢや、すぐ尋問にとりかゝつたら宜からう。』と腮で指圖をする。

『さうですね。』と直彌はそれに答へて、『これ松枝、俺が今日お前を呼んだのは何の爲だと思ふね、何の爲めに呼ばれるのだと思ふて來たねと先づ物柔かに尋ねた。

『……。』

松枝はハッと胸を突いた、かくあらんとは、先日知らして呉れた禮子の手紙で知つて、覺悟は充分して來たものゝ、さあとなれば、仲々急に返辭は出來ない。

直彌は前よりは少し調子を高めて、

『え、お前は何の爲に呼ばれたと思ふ？、お前はそれを知つてるぢやらう?!。』

『は、それは。』

松枝は首を垂れた儘に答へた。

『宜しッー。』と直彌は點頭いて、『そんなら早速本問題に移らう……松板お前は何の爲めに……何うして禮子をそゝのかしたね、それを一應聞かして貰いたいのぢや。』

此問ひたるや、必ず發せらるに相違ないと、昨夜から今此處に來る迄松枝が胸をなやました處である……然してまだ考へはつかないのだ。

『ね松枝、お前も青表紙の一二冊は讀んだ女だ、斯うすれば斯うなる位ゐの考へはもつて居やうぢやないか……お前はまさか、禮子をそゝのかして家出をさせ、而して兩親に御心配をかける氣で……さうゆう氣でやつたのか？。』

『……。』

『え、何故返辭をせんか、何故俺の云ふのに答へんのか、こら松枝ッ！、一体あの始末は何うしたのぢや、禮子はお前の子と思ふて居るか、馬鹿奴が……』と聲を荒らくしたが、母の咲子の此方を見て居るのに氣が付き、少し聲を低めにして、『これ、松枝、禮子はこの直彌の子たぞ、お前の爲めには兄の娘だ、お前はその兄の娘をそゝのかして家出をさして何うする氣だつたのぢや』と、云つて火鉢をゲイと引きよせて紙卷を吸つけた。

三十六　妾も人間ですよ

『……。』

松枝は猶答へない。

あまりの事に、父の孝祐もたまり兼ねて、膝をのり出し、

『松枝ッ！、貴樣は何故直彌の云ふ事に返辭をせんのか？、ウム、まさかお前はい

ゝ、くら人非人の古川に連れ添ふて居つても、あの禮子をかどわかして賣つて仕舞ふ氣でしたわけではあるまい』と屹度松枝を白眼んだ。

此時漸く思案を定めて、松枝は靜に顏を上げ、寂しき作り笑をし乍ら。

『ホ、、、阿父樣は飛んでもない事を仰しやいますね、いくら何でも妾も人間ですよ。』

『何ッ！、人間だ？、』と、此答へに孝祐はクワッと急き込んで、『ウム、に、人間とは宜く云つた、ウム、人間か、ハ、、、貴樣はいかにも人間だらう、鳥や獸でさえも身を殺してさえもかばう自分の子を……貴樣は芳樹を何うした、自分の子の……五歳になる芳樹を何うした、そゝそれでも、貴樣は人間と……、』

『ホ、、、變な事をお言ひで御座いますね、あれは彼れ、これは又これぢやありませんか、ホ、、、。』

松枝は空を嘯いた、母の咲子は唯、オド〳〵して居る。

『何がこれはこれだ！、コラッ！松枝、それはお前は正氣で云ふ言か?!。』

『ホ、、、多分正氣でしやうよ、それとも阿父様は妾を狂人と思し召すんですか、ホ、、、これでも自分は……。』

『何ッ、そ、そりや……宜しッ！、貴様は、貴様は、その氣だから現在血をわけた自分の事も振りすて、古川見たやうな人畜と腐れ合つたんだな、實に貴様は……ゆ、、、ゆるすべからざる奴ぢや。』

父の孝祐が怒るのを、松枝は平氣で眺めて。

『オヤ、又古川の事を云ひ出しましたね、ホ、、、そりや今更仰しやる迄も無いぢやありませんか、好きなればこそ、あ、やつて十八年も連れ添ふ……。』と、云ひかけた時、母の咲子は堪へ兼て傍から口を出した。

『まあ、松枝、お前は何を云ふんだね、お、お前は今日はまさか、阿父様に悪口しに來たんぢやあるまい。』

『ホ、、、お母様もですか、悪口を云ひに妾が？ホ、、、さうかも知れませんよ、何うせ妾のやうな不孝者は、不孝ついでにもう一番なんて氣を起しましてね。』

『何を……それは松枝、お前は何を云ふのだね、不孝序にとは……お前は眞實に氣でも……。』

『はい、如何にも氣が違つたと仰しやりや狂人にもなりましやう……然し』と兄直彌の方に振向き、『兄さん、貴方は先刻何とか妾に、大層六ケ敷い事を云ひましね、根が馬鹿な妾ですから、一度位ぢや、右から左と抜けて仕舞ますから、もう一度後生ですから、聞かして下さいな、よう。』と、馬鹿にしたやうな口吻。

『何ッ、も一度……。』

先刻からこらへ〳〵て居た怒りは一時に發して直彌は殆ど口もきけない。

『はい、、、もう一度承まはり度いと申すので御座います、妾が禮子をそ、のかしたとかで何とか……慥かそのやうに覺えて居りますが……。』

『い、い、如何にもその通りぢや……察する處、お前はこの駒澤家を亂さうとして
そんな事をたくんだのだなッ！。』
『ホ、、、、まア、おッかない顔して……ホ、さうかも知れませんよと云へば何んだか惡氣が有つてしたやうに聞こへますが實を云へや、妾が食扶持を貰つて居る計りでなく、子共の禮子迄、兄さんの娘とかなんとかなつて居つて……二人で自家を喰ひつぶすのも氣の毒だと思ひましたからね、實は、阿父さんのお察しの通り、誘ひ出して女郎にでも賣らうかと思ひましたのさ、ホ、、、、あれでも三百圓位やるになりましやうよ。』

三十七　怒髮冠を衝く

此の無法な松枝の言に孝祐も咲子もアッと呆れた、兄の直彌は尙更の事怒の聲鋭く、
『さ、三百圓位るになりましやうだ？、ぢや、き、貴樣は禮子を……。』

膝の上の拳はぶる〳〵と慄へた。
『は、それは仰しやる迄も有りませんよ、最も女郎に賣るか、藝者をさせるか、それは決定て居りませんでしたけれども……あゝやつて音樂學校に通はして置くから、藝者も宜からうとは一時は思つたんですけれども、よく考へて見ると……人の話を聞いて見ると女郎の方は藝者より氣樂だとも云ひますから、何れにしやうかと思つて、考へて居たんですよ、ホ、、、、夫の死んだ跡でその弟子と密通いて出來た娘ですもの、まさか華族の奥樣でも有りますまいよ、女郎や藝者位るの處は丁度宜からうと思つて……。』
『貴樣は、なゝ何を云ふ、そゝそれは正氣の沙汰か。』
『正氣ですとも、云はずともの事でさ、娘も可愛いが、考へて見れば古川も可愛いんですよ、月々三十圓位るの食ひ扶持で何處へ足りるもんですか、お酒も飲む時もあらうし、芝居の一幕も覗き度い事も有らうし、ホ、、、色と慾と一緒になつ

て、可愛さうではあるけれども、禮子を賣らうと……。』

『さ、さ、三十圓位ゐでは足らない？、禮子よりは古川は可愛い、それで禮子を……』と、父の孝祐も堪へ兼ねて叫ぶと、

『松枝や、お前今日は何うかしてるのぢやないかね、まあ何うして……よくも妾達ちの前で……と涙聲で母の咲子もすがらぬ計りに打ち歎げく。

松枝は尙も突ひを止めず。

『ホ、、、、また阿母さんもお口を貸すんですか、阿父さんもお止しなさいな、ホ、、、老人と何とかは引込む程善いとか云つてますよホ、、、。』

『まあ――』と咲子は呆れる。

『松枝、何んだと、老人は何うしたコラッ。』

父の孝祐は怒髮冠を突くの憤りをなして、打ちも据ゑん氣色に、慌てゝ直彌は、

『まあ〳〵阿又さんは默つていらして下さい、萬事私が……』と押し止める。

松枝はその有樣を、上眼づかひをしてヂロ〳〵見ながら、蔑むやうな笑ひをして、

『凄いよ、矢張兄さんは兄さんだわ、オホ、、、ね兄さん、天保生れの老父さんは話せませんからね』と馬鹿にするやうな口吻。

『何ッ天保生れの爺だ』と、孝祐は又もや立ち上らんとするのを引き止め乍ら、

『コラッ松枝貴樣は、何を云ふ、貴樣は父に對して何を云ふか、天保老人とは何の事だ、惡口も宜加減にしろッ』と直彌は法庭に於て罪人に對する如き態度で、御子吼した。

『まあ可笑しい、オホ、、、、兄さん、人聞きも惡い、隣の嬰兒の眼をさまします、よ、こゝには雙は居りませんからね……然し兄さん、天保生れと妾が云つたのは何が阿父樣を輕蔑する事に當るんですか、そんなら云ひますまい、けれども……だつて阿父樣は天保生れの方ぢやなくつて？。』

『何をッー、き、貴樣は、貴樣は何を云ふのだ、松枝それは、人の子の親に對し

云ふ言かッ。』

滿面朱を漲らして直彌は叫んだ、けれども松枝はビクともしない。

『こりや兄さん、變な事を承はりますね、貴方は法律家とか、判事とか仰しやる方だから、まさか無い事を有ると仰しやるやうな事が有りますまいか……兄さん、此頃何か、その親に對して子供が斯う云へとか、然う云つてはいけないとかといふ法律でも出來たんで御座いますか、さうだとしますと、妾は何も知らないもんですから……。』

『ぢや、き、き、貴樣は……松枝ッ！、貴樣は此俺迄も頭から、け、輕蔑してかゝつて居るんだな』と吐く息ざしもせはしく、火をや吐かんと思はるゝ直彌の形相。父の孝祐は怒りの齒をかみ鳴らし、母の咲子は今は堪へかねて泣き伏す、まさにこれ好個の修羅場。

三十八　巣鳴の御料理

一方が怒れば怒る程、それ丈け松枝は落付き拂つて、

『オヤ、又兄さん變な事を云ひ出しましたね、妾が兄さんを輕蔑するなんて……まあ、妾が何時……』と、わざと呆氣る。

『い、い、何時、い、今、貴樣は何と云つた、それが、此の俺を……獨り俺計りでなく阿父さんや阿母さんを輕蔑するのでなくて、な、何ぢや。』

『いまの？？、まあ……オホ、、、、法律屋とか判事樣とかいふものは、さうしたもんですかね、ホ、、、、隨分勝手な事が云へて面白い職務ですね、そんなものなら、妾一日でも宜いからやつて見たいんですが……。』

『貴樣は未だ、そんな事をッ！。』

父の孝祐は、怒りにゆるむ直彌の手をスルリと拔けて、亂れかゝつた松枝の丸髷を

つかんで、いやと云ふ程その頬を擲つた。

『なにをまあ貴方……。』

『そんな手荒な事を阿父さん……。』

左右から止める、妻と子の手を振り拂つて、孝祐は滿身の怒を拳にこめて、ポカポカとつゞけ様に打つのである。

『き、貴様は、貴様のやうな奴は、打つて〳〵て、打ち殺しても飽き足らん奴ぢや、直彌も婆さんも止めて呉れるな、不孝者の成敗は此の孝祐がやるッ！。』

『けれども阿父さん！。』

『もし、貴方、怪我でもさせると。』

怒りの中にも直彌と、咲子は双方止むれど、突倒された松枝は涙一滴こぼさず。

『兄さん、阿母さん、餘計なお世話よ、うつちやつて下さいな、阿父さんは妾を成敗しなさると仰しやるから、ホ、、、何んな事をなさるか、思ふ存分されて見ますから……阿父さん、さあもう少し強くは打てないのですか、ホ、、、、眞實に年を老ると力も抜けると見えますね、も一つそれ肋でもゴッいて一層の事殺して下されや宜いのに、さうすると、阿父さんも巣鴨の御料理を……。』

『む、む、無論の事ぢや、何ッ、この俺が力が抜けた、よしッ、その口を忘れるなッ。』

老の一徹、松枝が不敵の惡口雜言に前後の考へもなく、尚も打たんとするを直彌は強いてその手を引き離し、素の座に押なほし、

『阿父さん、貴方も亦何ですね、千金の弩は、鼠の爲めに放たず、こ、こんな犬畜生を打つたつて、な、なんになります。』

『ぢやと云ふて、あまり……聞き捨てにならぬ事を……！』と又立ちかけるを、咲子は引き留めて、

『まあお止しなさいな、あんな者を打つたつて……あゝ何とした情けない事だらう、

ま、ま、松枝、お、お前は何どした……ど、何處迄妾達ちに……。』

聲を立てゝ咲子は泣き伏すに、孝祐もいさゝか力抜けて、唇を嚙んだまゝ、無言で強く松枝を白眼める。

松枝は亂れし、衣紋をかいつくらうともせず、そのまゝ、身体をくの字形に曲げて、憎く〳〵しげなる笑ひを……

『ホ、、、阿父様、拳は痛くありませんでしたか、ホ、、、頬なんか擲つたつて妾痛いと思ふもんですか、妾の面は千枚張り、ホ、、、お氣の毒様でしたね』と父の方を見る。

『何ッ』と、又孝祐は飛びかゝらんとすれば、直彌は、それを抱き止め、

『阿父様ッ、なゝ何を云つたつて駄目ですよ、打つた處で、斬つた處で、良心の滅失した者は……阿父様ッ、もう、ま、松枝を人間と思へや間違つて居ります、ちゝ畜生と……。』

と云つて悲憤の涙を拂つた。

『ウム、さうだ、ハ、、如何にもお前が云ふ通り……』と孝祐はどたりと、仆れるやうに据つて、

『婆さんや、松枝はもう……眞實の松枝は十八年前に千原家を去る時死んで仕舞つたんだぞッ！。』

三十九　可愛い夫

老母の咲子は只泣き沈む計り、直彌は素より孝祐も……獨笑つて居るのは松枝計り。

『さあ兄さん、何うなさるんです、先刻の話は何うなさるつもりですか、妾はもう女郎に賣る氣だつたと、白狀してるぢや有りませんか、斯う暴露て仕舞や、妾も古川辰次郎の妻の松枝です、何んな事をされやうと決して悪びれは致しません、さあ切るなり、打つなり、勝手になさい……兄さん、ホ、、何故泣くんです、

男の泣き顔はみつとも有りませんよ。』

何處迄圖々しいやら底の知れない松枝が言に、直彌は奮然として涙を拂ひ、

『ウム、宜い覺悟だ、む、む、無論その宣告は……き、き、貴樣のやうな人非人に口をきくのも汚らはしいけれども、仕方が無い、いかにも、き、貴樣の言ふ迄もなく……。』

『あら、さうですか、嬉しい事、妾が云ふ迄もなく、きまりをつけて下さるんですか、斬ると云ふんですか、それとも突くんですか、然し妾を殺すと兄さんも、ホ、、、それは兄さんは……妾が云ふ迄もなく、法律屋さんだからそんな事はなさるまいが……して見るとなんですか、月々の食扶持を取り上げて、未來永世勘當ぞやと云ふ、芝居がゝりで來るんですか、それとも……。』

『……貴樣は、實に……いや俺は何も云はん……無論貴樣への手當は、云ふ迄もなく……。』

『あらさうですか、ホ、、、有難う、實は妾もそれを望んで居たんですよ、先祖が貯めたお金で贅澤な眞似をなすづていらつしやる貴方から、一文でも貰ふのは、厭で〳〵ならなかつたんですけれども、ホ、、、呉れると云ふものを厭だと云ふのも、情知らずだと思はれてはならないと思つてホ、、、。』

『ウム、何とでも勝手な事を云へ……然し松枝、禮子は何處迄も貴樣の娘ぢやないぞッ。』

『それは百も承知、二百も合點と云ふ處ですよ、ホ、、、、段々聞いて見ると、女郎や藝妓に賣るのは大層六ケ敷と云ふ事ですから……して見ると、第一兵粮に困りますからね、ぢやお氣の毒樣乍ら、禮子はお賴み申しますよ……さうして妾は何となさるんですの？。』

『何とは？。』

『何とは、何との事ですよ、ホ、、、血の廻りの鈍いにも呆れて仕舞ふわ……こま

りその何ですよ、妾が禮子をそゝのかしたといふ罪で御座います。」

『何ッ！』と、直彌は、覺えず齒を食ひしばりて、眼を光らしたが、傍に前後不覺に泣き伏す老母の咲子と、血もにじむ計りその唇を嚙んで、身体を慄はして居る父孝祐の方を見て、思ひ返し、『いや、その事はもう何も云はん、勝手にせ、兄弟でも親戚でもない者の罪を質すのは裁判所でちや、さ、さ、左程俺の手にかゝつて罪を調べられ度いならば、ふ、ふ、古川の首でも取つて……』と、云ひも敢へず、ハラ〳〵と涙をこぼした。』

松枝は、流眼にヂロリとそれを見やりて、

『ホ、、、ちや妾をお許し下ざる……有難う御座います、然し兄さん。』

『き、貴樣見たやうな、に、に、人非人を妹に、も、持たんわ。』

『ホ、、、これは失禮、ちや直彌さん、これなら宜いでしやう、ねえ直彌さん。』

『……。』

直彌は何事も云はずに、只眼を瞑つて、見ぬふりをする。

松枝は尙も、その嘲罵の鋒先きをすゝめて、

『モシ、直彌さん、駒澤直彌殿、今貴方が何とか仰しやいましたね、古川の首を何うとかつて……折角の仰せですから、妾もはいと承知し度いけれども、そりやいけませんよ、何故つて考へても御覽なさいな、古川は妾の爲めには天にも地にもたつた一人の可愛い夫ぢやありませんか、だから、それ丈けはね、ホ、、、』と云つて、其處に有る母の煙管をとつて、一服するのであつた。

四十　赤の他人

『そ、そんな事は如何でも宜い、俺が、し、知るもんか……。』

直彌は横を向いた。

『知らない、はあ左樣で御座いますかですよ、ホ、、、、時に直彌さん、駒澤直彌

殿、外になんぞ御用はありませんか、用は無けりや、妾これでお暇しましやう、ホ、、、これでも家では待つてる人が有りますから……。』

『よ、用なんか有るもんか、か、勝手に……。』

『ホ、、、ぢや阿父様は？、阿母様は？。』

振り返つて二人の方を見た。

『俺だとて無論の事ぢや、き、き、貴様見たやうな人畜に……歸るならさつさと歸れッ。』

父の孝祐は一喝した。

『では阿父様は用は無いとして……あの阿母様は？。』

『……。』

咲子は只泣く計り返辭をしない。

『ぢや阿母さんもお言のない處を見ると、別に御用はないと見えますね……』と、

松枝は時計を見上げて『オヤ、もう何時の間にか三時半になつたんだよ、これからそろ〳〵歸つて……、大層お邪魔致しましたね、ホ、、、お喧ましう、左樣なら』と云ひすて、立ち上ると、今迄泣き伏して居た母の咲子は、いきなりその裾をヒシと摑んだ。

『ま、松枝ッ、ぢやお前は……い、い、今いつた事は……。』

『ホ、、、何ですね、お止しなさいよ、歸りますから、これから家に歸つて、夕飯の仕度をしなけりやなりませんから……。』

『松枝、お、お前は、ど、何處迄妾に苦勞をかける……。』

『苦勞をですか、ホ、、、そんな事は妾阿母さんに頼みやしませんよ好きで苦勞をなさるなら格別、ホ、、、、阿母さんも年を老したのね、妾これで二度と再び、こんなケチな家には來やしませんから……。』

と、すがる母の手を振り放さんとすれば、老母はます〳〵堅く抓んで、

『これ、ま、松枝、お前は、それが本家の沙汰か、正氣で云ふのか……よもや正氣では……これ松枝、阿父様にも、兄様にも宜くお詫びをして……こ、この阿母さんが、た、頼むから、松枝、何うぞ……』と、聲を慄はして云つた。

松枝は、立つた儘、足下の母を、憐れむやうに鳥渡見下ろしたが。

『ホ、、、見つとも無い止して下さいよ、正氣で云つた事ですとも……お詫も何もいるもんですかね、親兄弟で有つて見りや義理にも何んだけれども……お暇致しますから放して頂戴、放して』と、意地張る母の手を無理に引き放して、涙を流して、打ち見る、父と兄との方には見も返らず、出口の唐紙を、手荒く明けたが、それと同時に、ハッと飛び退いた。

其處は海老茶袴の禮子が泣き伏して居るのだ。

『お、、お前は禮子さん……。』

『阿母さん！。』

松枝は其處に立ちすくんだ。

『阿母さん、あ、あ、貴母は何うして……あれ程妾が手紙に……』と云ひも敢へず、禮子は、松枝の袂にすがつて泣くのである。

松枝も此時初めて、ハラ〳〵と涙をこぼして、

『禮子さん、もう、い、い、今からは、妾は禮子さんとは全くの赤の他人なんだよ、わ、妾は、げ、現在血をわけた、娘のお前を、げ、げ、藏妓に賣らうとした、ひ、人鬼なんだもの……。』

『たつてそんな事は……。』

『いや、もう何も云つてお呉れでないよ、妾は妾丈の考が有るから……』と斷腸の苦しみをジーッとこらえて『禮子さん、左様なら……』と、その手を放すと『あれ』と又禮子は追縋る。

それを見るより義父の直彌はット立つて禮子を松枝から引き放した。

『これ禮子ッ！、今、松枝が云ふ通り、もうこれからはお前は眞實の他の娘ぢや、こ、これはのう母ぢやあない、母の形をして居る惡魔ぢやぞ。』

此暇に松枝此處を抜けて、烏渡禮子の方を見歸つたが、忽ち思ひ回して、出で去つた。

禮子は身をもがいて泣く、直彌も……一座はヒッソリして、唯鼻をすゝる音計り。

中庭に面した樣にかけて置いた籠の中のカナリヤは此時俄かに囀り初めた。

四十一　過去の罪

金助町なる駒澤家から、御徒士町の我家の前迄、脱兎の如く、夢中に急ぎ足で飛んで歸つた松枝は戸口を開けて家中に入らうとした時、ハット我に歸つた。

『おゝ、妾は一体何うしたので有らう。』

これは第一に彼の念頭に浮んだ處である。

老父、老母、兄、禮子、自分、あゝ自分は今しも、駒澤の家を、禮子の縋る手を拂ひ退けて來たのではないか、あゝ自分は……、斯う再び考へた時には、最早、家に入る程の勇氣は出なかつた。

懇しかりし父、懷りし母、慕はしかりし兄、懇しく懷かしくいとしかりし禮子、あゝ自分はそれ等の情けを我から切つて……と思ふと、同時に何うしても入らねはならぬ此家の奥には、我をして、かくならしめた惡魔が居る事にも考へは及んだ。

『おゝ、何うしやう』と、身懷ひして、やゝ暫し考へて居たが、『えゝ、まゝよ』と、舌打ちして、自家に入つた。

『今歸つたよ。』

駒澤家で破裂しかけた瘠癪玉を、憎いく古川の前で破らうと思つて、わざと松枝は横柄に云ふのであつた。

『……。』

家中はシーンとして物音もない。

『オヤ何うしたのだらう、又飲みに出たのかしら』と、松枝は首をひねり乍ら、上り様に障子もこはれよ、壁も裂けよと計り、亂暴に足音を立てるのであつた。上り口の三疊には素より、右手の六疊にも、奥の四疊半にも、古川の姿は見えない。松枝は、六疊の長火鉢の前に、グタ〳〵と座はつた。

『まあ、又何處かへ飲みに行つたんだよ』と獨言して、投げすてゝ有る煙管をとりあげて、煙草を吸はうとしたが、火鉢には盤程の火もない。

『チョッ、眞實に、あんな畜生つたら有りやしない。』

いま〳〵しさうに舌打ちして、四邊を見廻はし、鐵壺の上に載せてある、マッチを取つて、パッとすり、スパ〳〵と、二口計り吸つた、が、舌を刺す、脂の苦さに、慌てゝはたいて、煙管を其處に投り出した。

『あゝ……。』

滅入るやうな欠呻をして、重さうに頭を振つたが、やがて突伏す。

『一体妾、今阿父さんや、兄さんに何んな事を云つて來たのかしら……。』

斯う一人言して、松枝は又、それを考へ初めた。

門前の懐旧、兄嫁との對面、それから奥の間に通されて……其處には、父も母も兄も居つて……それから自分が禮子をそゝのかして、家出をさせやうとした事を詰られる……おゝさうその時自分は何と云つたらう、何と答へたのであらう、父母や、兄は自分に何んな事を云つたうたので有らう。

あゝ、自分は何んで、あんな事を云つて、強いて、父母兄弟の怒りを買つたので有つたらう、禮子をそゝのかす……それは夢にも知らなかつたのである、即ち昨日禮子よりの手紙で初めて知つたのだ……而して自分の手元に置くのと、兄の家に置くのと、何れが禮子の爲めに宜か位ゐの事は自分も知つて居つたのだ、何で自分は禮子をそゝのかして見す〳〵不利益の地に陷入れるやうな事をしやう、自分は禮子が